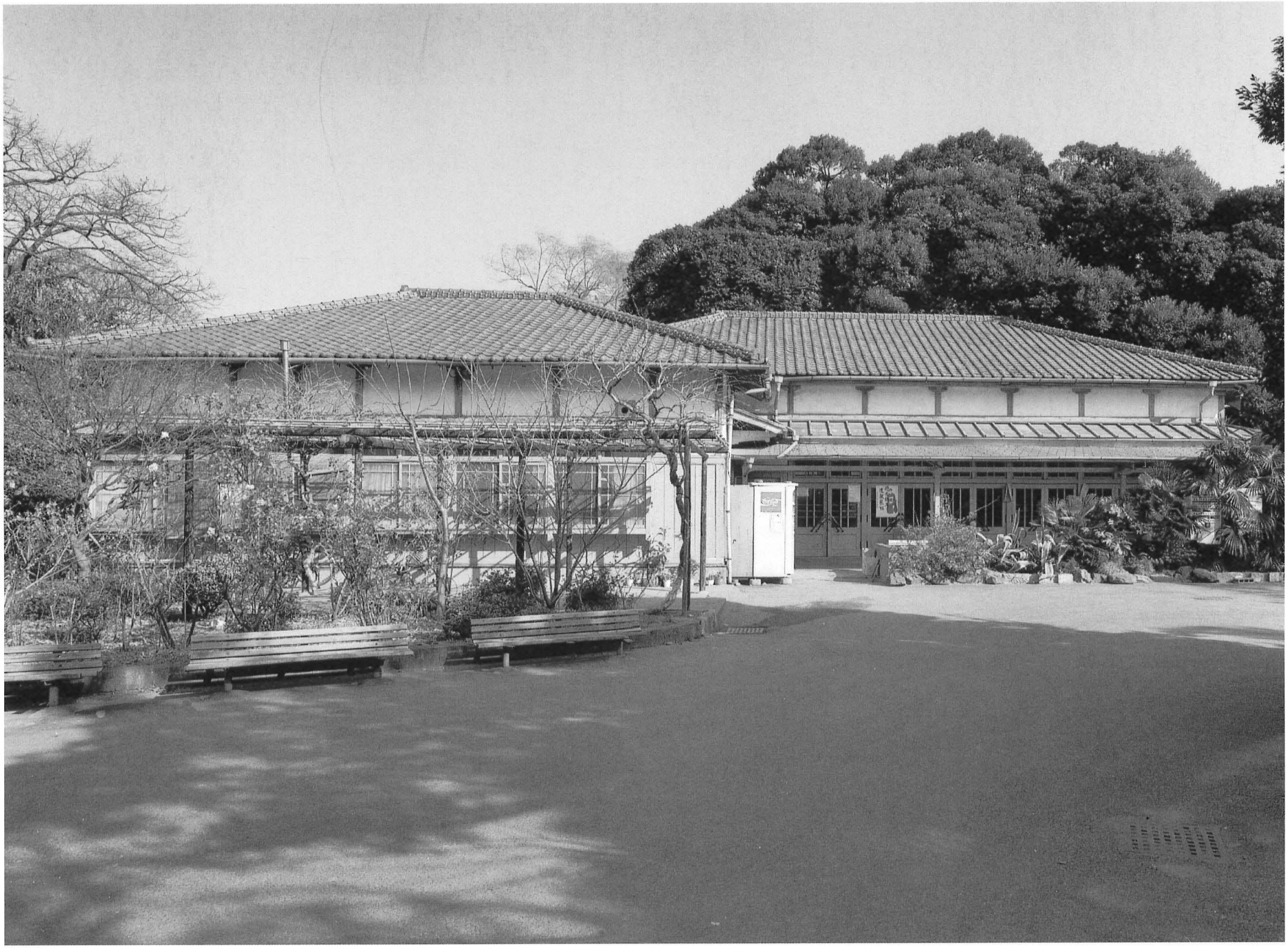
旧美術学部食堂
記録調査報告書
（東京美術学校生徒集会所・旧大浦食堂）

1997年

東京芸術大学　美術学部
建築科　前野研究室

全景：椎の木から西側をみる



全景：中央棟から西側をみる

南側をみる

食堂東南側をみる

喫茶室をみる

食堂西側をみる

食堂南側をみる

澄川喜一学長挨拶

私が入学した（昭和二十七年）頃の大浦食堂は現在の絵画棟の位置にあった。食料難で米を持参し一食一円の焚き賃でおかずは実の無いみそ汁だった。解体された食堂は梅林と呼ばれ美術学部に二つ食堂があった。どちらにも御世話になり思い出は尽きない。

昭和三十三年、音楽の三号館が工芸科のあった位置に先づ新築され、同三十五年に現在の工芸棟が竣工、順次改築のマスタープランに添って昭和四十五年 絵画棟・四十六年 彫刻棟・四十九年 中央棟と進行した。音楽の五号館の位置にあったトンガリ帽子の洒落た工芸棟や日本画・油・彫刻のアトリエだったどっしりとした寺院のような本館等次々と解体された。思い出せば時の流れの早さを痛感する。

先輩達の優れた作品が創立以来百十年の歴史と共に資料館に残されているようにこれからも続々と輩出する後輩達の作品も収蔵できる施設が必要である。そして貴重な資料を公開し、また研究発表の場となり芸大の顔として文化の発信地になるための美術館の位置は美術学部の将来計画を視野に入れ食堂跡が最適地と判断した。

開口部が多く地震のないことを毎日祈っていたが、特徴のある天井を見ながら豆腐のバタ焼を食していた。解体の前日まで学生諸君がやさしくいたわるように掃除していた。私も同じ気持ちで一ぱいだった。

六十三年間、多くの人が御世話になった。新しい食堂として生れ変り又多くの人を迎えて欲しい。記録調査にご尽力下さった前野教授と関係者の諸氏に深謝したい。

合掌

平成九年三月二十四日

澄川喜一

◆報告書の作成にあたって

建築科教授　前野まさる

学生と食堂

昭和20年代まで、美術学部には美校以来の食堂が２ヶ所あった。一つは現在の彫刻棟の玄関口のところにあり、そこが大浦食堂だった。他の一つは解体された旧大浦食堂のところにあり、梅林食堂と呼んでいた。昔、校門のわきに梅林があったことから、そう言う呼び名が付いたものである。大浦食堂は和風の料理で、梅林食堂は洋食であった。

二次大戦後は、復員軍人の学生や教師が上京してきても、住むところもなく、校舎の中に学生や教師家族が寝泊まりしていた。こうした学生や教師と食堂のおやじ・女将とのエピソードは多い。当時、食料は配給制で美校も隣組の一つとなり、学生も食堂のおやじも配給受けに並んだもので、互いに助け合って生活していた。また、故郷をはなれ３帖ほどの部屋をやっと借りられた学生にとって、食堂は朝食から夕食まで食事の全てを世話になり、食堂の女将はおっかさんのようなものであった。

最近は、台所と風呂付きの独身者用アパートが多くなり、外食の苦労は減ってきて、食堂のおやじ・女将と学生の関係も薄らいできたようだが、学生食堂は、依然として教室と違ったもう一つの学生生活の拠点であることには変わりはない。息抜きの休み時間に友人とのおしゃべり、男女の話から車の話。興味をそそらない授業をこっそり抜け出し、行く先は食堂、友人を探す時も先ず食堂、少しレベルをあげた人生論、芸術論、講評会で教師に言えなかった反論など、食堂での学生時代の想い出は尽きないだろう。

美術館建設と上野ギャラリーの道

現代に相応しい美術館の建設は、芸大の長年の願望であった。特に、昭和50年代頃から、東京都美術館で開催していた卒業制作展の会期が、都内五美術大学の合同卒業制作展の時期と重なるようになってから、公平を期する都美術館の方針で芸大展示場が縮小される方向となり、芸大自前の新美術館願望が強まった。芸大には、現在4300余点の重要文化財を含む貴重な美術品や楽器が収蔵されているが、その収蔵庫も狭く、管理設備も旧型となって設備の更新も求められていた。昭和62年に芸大創立100周年を迎え、新美術館建設の構想は加速された。しかし、芸大にその余地はあるのだろうか。

昭和30年代以来の講座増設や大学院設置、学生定員増加などで、芸大美術学部の施設は狭隘となり、本格的な付属美術館を上野のキャンパス内に建設するためには、工芸棟と資料館の間の余地しかない。しかし、その下には京成電車のトンネルがあり、地下を掘ることはできなく、かつ、上野公園地域は高度制限があって、15m 以上の建築は建てられない。このような条件のもとでは、芸大の求める十分な美術館はできない。

残る場所は、旧大浦食堂の敷地しかない。この敷地は博物館前を通る屏風坂からの通り

（博物館・芸大の前の通りは無名）に面し、この通りには、東から東京科学博物館、東京国立博物館、旧東京音楽学校奏楽堂、黒田記念館、正木記念館、陳列館などの歴史的な公共的な文化施設が建ち並ぶ。更にこの道の西の続きの細い道（通称おめかけ新道）には浅尾のモデル斡旋所、言問通り角には台東区の郷土資料館吉田屋、谷中道には私設のギャラリーSCAI THE BATH HOUSE、アートフォラム谷中、などがつづく。日暮里につづく諏訪道にも朝倉文夫のアトリエがあり、上野の山の尾根道にはこのように公私の多くのギャラリーがある。このギャラリーの道に芸大の美術館が加わりリンクしていけば、芸大のみならず谷中方面につながる活性の大きな力となることは疑いない。上野の地域住民も芸大の新美術館の建設には期待するところが大きいと言う。

記録保存

旧大浦食堂建築に大きな親しみやなじみを感じていた教職員、先輩、学生諸君が多くいたことは、この建築にとって大変しあわせなことだった。こうした諸氏の気持を取材記録し、更に、建築を実測記録保存することで、この梅林・大浦食堂の歴史を永久に残すことにした。この記録保存について、六角鬼丈先生のご支援は大きな力となった。

記録保存の方針は１）建築実測調査と図化、２）写真記録、３）歴史調査、
４）発掘調査記録、５）想い出記録、とした。

実測と編集は、建築科前野研究室，文化財保存学科斎藤研究室の大学院生と研究生があたった。実測調査は平成７年12月に行い、図化は平成８年４月までかかった。図面は平面，立面，断面，展開の各部の図面を作成。塗装調査は表面を薄く剥ぎ、各部の色と塗装の順序を調査した。構造については、温品先生に関東大震災復興の耐震構造であるとの見解をいただくことができた。写真記録は写真センターの佐藤助手があたり、発掘調査記録は構内発掘調査団の山内利秋主任調査員に執筆していただいた。生徒集会所時代の情報収集には天野氏，清家先生，今里氏，大関氏など建築科の先輩諸氏のお手を煩わせた。また、施設課からは芸大の敷地図面をお借りした。

学生時代の食堂の想い出話は大沼学部長、宮田先生、助手の柿崎先生、図案科の大先輩の中山正人氏、音楽学部ではOGの鬼久保さんからもお話しをうかがうことができた。最後の旧大浦食堂の記憶を留める意味で、在学生の芸術学高木さん、油科三浦さんと秋好さん、大掃除をした油科田島さん、コンサートを企画した建築科金森さんの寄稿を掲載した。故大浦夫妻の裏話は齊藤仁さんの著書「上野の森の芸術家たち－東京芸大ちょっと聞けない裏話」から抜粋させていただいた。

大沼学部長の学生時代の想い出の中で、食堂は学生の食生活と制作と社交の場で、「アトリエと同じ様な感覚で、ごくごく自然なかたちで自分たちの共通の場所だった。」と云い、学生生活と一体をなしていた様子がうかがえる。また「一番感動したのは、取り壊しの時に学生が全体を作品化したこと。作品の素材として活用していただいたことがとても感動的だった。」との言葉をいただいた。これをはなむけの言葉として食堂に贈りたい。

目　次

口絵（記録写真）　　撮影／佐藤時啓

美校、芸大食堂の歴史……1

旧美術学部食堂（東京美術学校生徒集会所・旧大浦食堂）の建築について

建築概要……4

経緯……5

意匠上の特徴……6

設計者について……8

評価……9

実測図面　図面リスト……10

配置図　縮尺　1：400……11

平面図　縮尺　1：125……12

西側立面図　縮尺　1：125……13

南側立面図　縮尺　1：125……14

東側立面図　縮尺　1：125……15

北側立面図　縮尺　1：125……16

南－北断面図　縮尺　1：125……17

東－西断面図　縮尺　1：125……18

食堂西側・南側展開図　縮尺　1：125……19

喫茶室　展開図　縮尺　1：125……20

天井伏せ図　縮尺　1：125……21

鳥瞰図……22

俯瞰図……23

色の歴史……24

美術学部構内の発掘調査：埋蔵文化財調査からの報告　山内利秋……25

大浦食堂のオヤジさん、おばさん　齊藤仁……28

卒業生の想い出……34

在校生の活動記録……41

食堂裏話……48

企画室、生協等　俯瞰図……49

編集後記……51

◆美校、芸大食堂の歴史

「大浦食堂」の名で親しまれたこの建物は、周りに梅林があったことから、昔は「梅林食堂」と呼ばれていた。ここでは、この建物の取り壊しまでの歴史を、聞き取り調査等を中心に紐解く。

この建物は、昭和８年和田校長時代に生徒集会所として建てられる。このことは昭和９～10年に至る美術学校一覧敷地建物略図に、初めてこの建物が描かれていることからもわかる（P.2資料)。そして昭和12年に、大浦英一（以下大浦）が食堂の営業権利を購入し、このときから食堂としての歴史が始まるものと思われる。先輩諸氏からの聞き取り調査では、それ以前の生徒集会所時代に、既にお汁粉屋が入っていたなど情報も得たが、当時の文献資料からは確認できなかった。

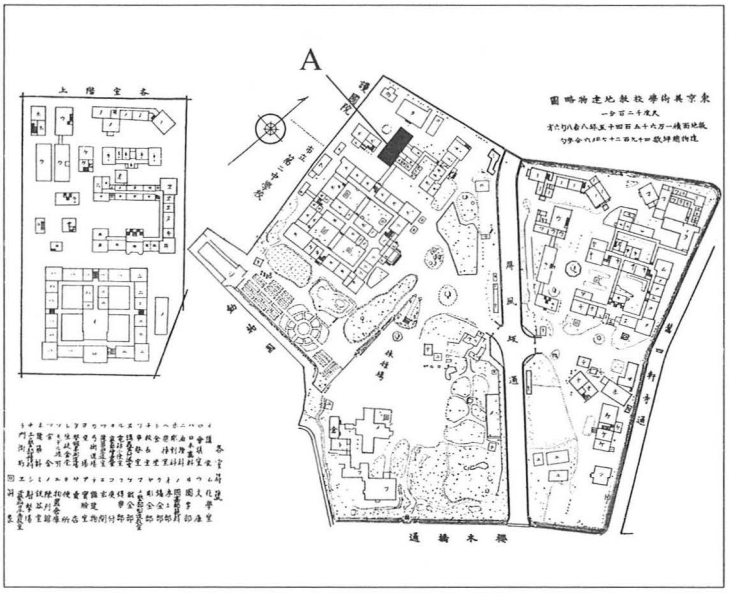
大浦は梅林食堂を営業し始めたものの、戦争が激しくなるとやむを得ず閉店することになる。正確な期日は定かでないが、学徒出陣の始まった頃はまだ営業していたらしく、おそらく昭和18～19年頃だろうか。状況が落ち着き、大浦が再び芸大に戻ってくるのは戦後の昭和24年になってからである。しかし、この時既に足立嘉雄が梅林食堂の中で営業していたため、大黒天側の食堂施設にて営業再開する。この施設は大正２年に建てられ、当初は生徒控所及び付属室であったことが大正元年～２年に至る美術学校一覧敷地建物略図からわかる。いつ頃から食堂になったのかは定かでないが、確認できた最も古い資料では、昭和７年12月校友会月報に「東京美術学校生徒控所　下谷広小路　松山鮨直営」の広告が掲載されている。その後、他にも「久保山商店」などの広告が掲載されていることから大浦が戦後になって開店する以前に、いくつかの食堂の歴史があったことが伺える（P.３資料)。この大黒天側の食堂は「第一食堂」、そして梅林食堂は「第二食堂」とも呼ばれていた。

上述の足立嘉雄（以下足立）は、戦争で焼け出され構内で生活していた当時会計係だった長谷川栄一の甥に当たる。そのような関係から食堂経営は素人であったらしいが、梅林食堂で開店することになる。聞き取り調査では、昭和20年８月15日には既に梅林食堂で営業していたようである。

昭和32年頃に、第一食堂で営業していた大浦が学校改築計画との関係で、梅林食堂に移った。第一食堂はその後、売店、自治会室に使用されたようである。こうして、足立、大浦の２食堂が梅林食堂内で営業することになり、大浦は喫茶側を使用していたらしい。この状態が５、６年続くが、昭和37年に足立の厨房からボヤがあったため、その後は大浦のみとなり、現在の学生がよく知る食堂と喫茶に分け営業を行っていた。しかし、平成８年美術館建設により取り壊しになり、63年のその建築生命を終える。

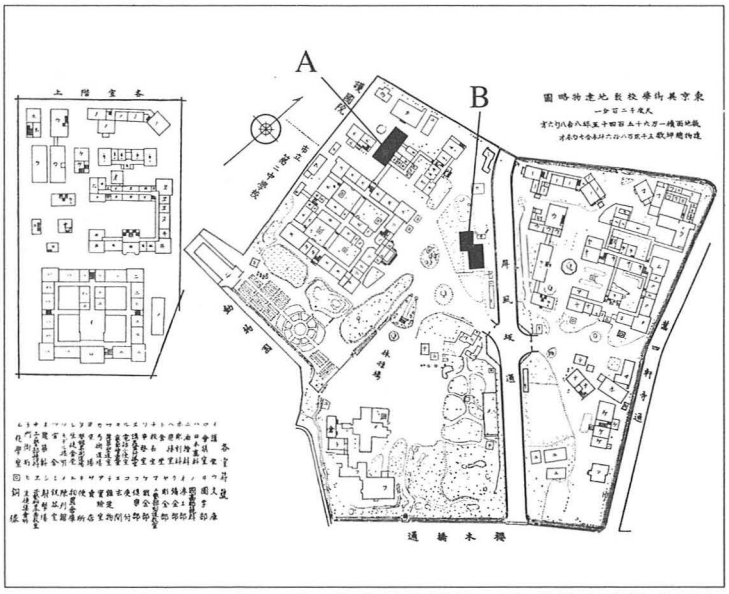
（加藤雅大）

○A は大黒天側の食堂（第一食堂）である。まだ旧大浦食堂（梅林食堂／第二食堂）は描かれていない。



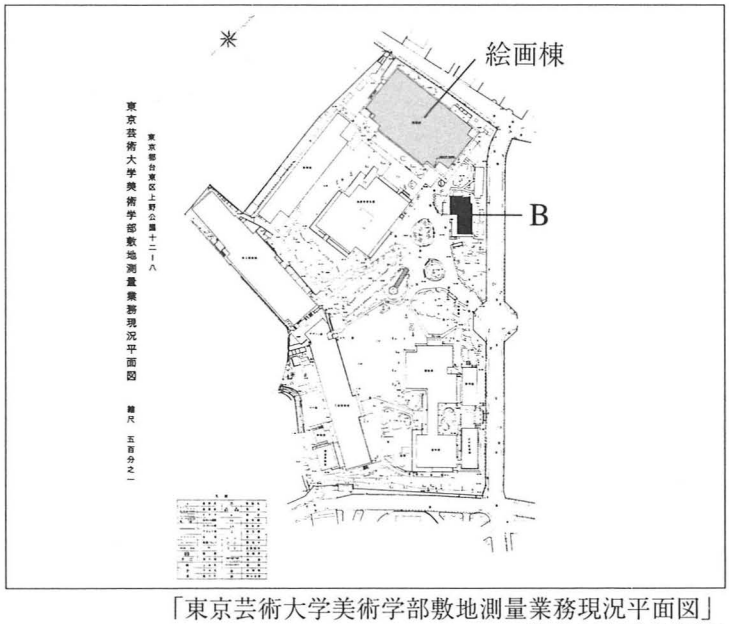
昭和８～９年に至る東京美術学校一覧「敷地建物略図」

○B の旧大浦食堂（梅林食堂／第二食堂）が登場する。このことからも昭和８年に建築されたことがわかる。地図では A が食堂、B が生徒集会所として記載されている。



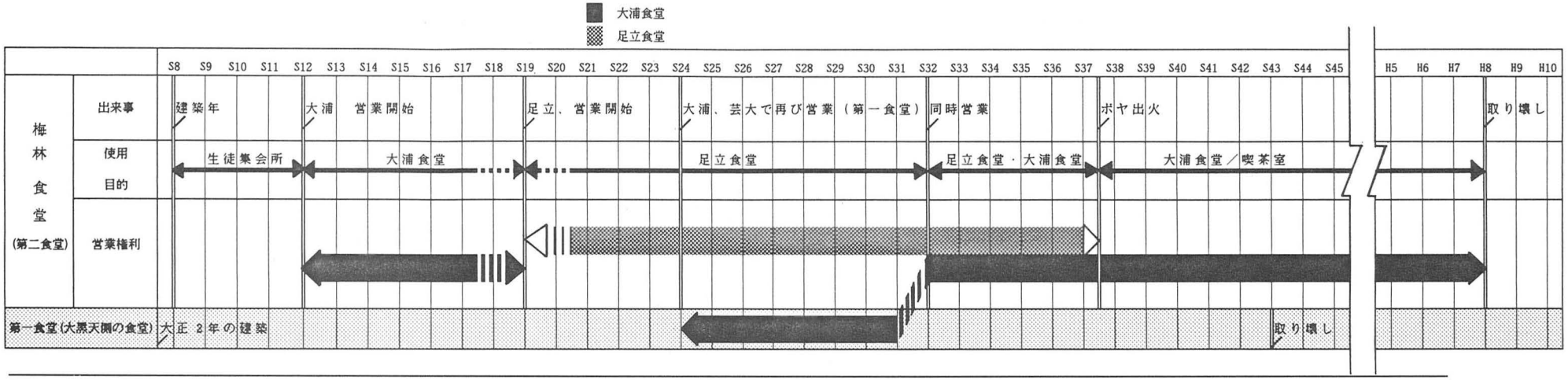
昭和９～10年に至る東京美術学校一覧「敷地建物略図」

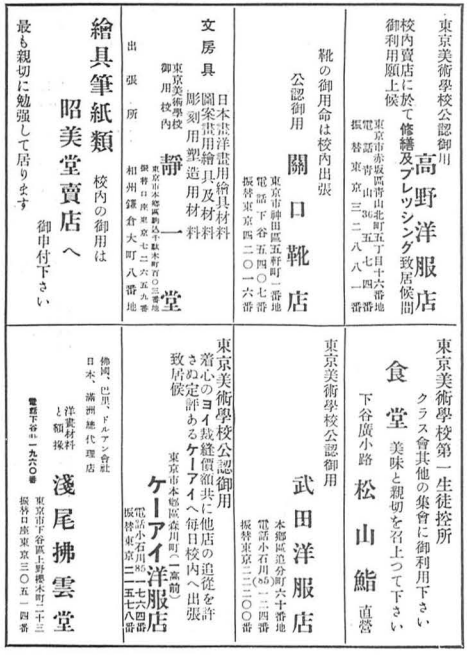
○昭和43年、絵画棟新築のため A が取り壊されたことから、B の旧大浦食堂だけになる。



「東京芸術大学美術学部敷地測量業務現況平面図」
昭和62年８月測量

旧大浦食堂（梅林食堂／第二食堂）年表





東京美術學校公認御用
高野洋服店
校内賣店に於て修繕及プレッシング致居候間御利用願上候
東京市赤坂區青山北町五丁目十六番地
電話青山(36)五七四一番
振替東京三二八八一番

靴の御用命は校内出張
公認御用 關口靴店
東京市神田區五軒町一番地
電話下谷(83)五四〇七番
振替東京四二〇一六番

文房具 圖案畫用繪具材料 彫刻用塑造用材料
東京美術學校御用校内
靜一堂
出張所 相州鎌倉大町八番地

美校で使用品は何んでもある
昭美堂賣店へ
最も親切に勉強して居ります

東京美術學校第一生徒控所
食堂 美味と親切を召上つて下さい
下谷廣小路 松山館 直營

東京美術學校公認御用
武田洋服店
本郷區追分町六十番地
電話小石川(85)二三四番
振替東京二二二〇〇番

洋食材料と繪具
佛國、巴里、ドルアン會社
日本、滿洲總代理店
淺尾拂雲堂
東京市下谷區上野櫻木町二十三
電話下谷(83)一九六〇番
振替口座東京三〇五一四番

昭和７年12月「校友会月報」の広告

東京美術學校公認御用
高野洋服店
校内賣店に於て修繕及プレッシング致居候間御利用願上候
東京市赤坂區青山北町五丁目十六番地
電話青山(36)五七四一番
振替東京三二八八一番

靴の御用命は校内出張
公認御用 關口靴店
東京市神田區五軒町一番地
電話下谷(83)五四〇七番
振替東京四二〇一六番

文房具 圖案畫用繪具及材料 彫刻用塑造用材料
東京美術學校御用校内
靜一堂
出張所 相州鎌倉大町八番地

美校で使用品は何んでもある
昭美堂賣店へ
最も親切に勉強して居ります

東京美術學校第一生徒控所
クラス會其他の集會に御利用下さい
食堂 美味と親切を召上つて下さい
角田晴彦

東京美術學校公認御用
武田洋服店
本郷區追分町六十番地
電話小石川(85)二三四番
振替東京二二二〇〇番

洋食材料と繪具
佛國、巴里、ドルアン會社
日本、滿洲總代理店
淺尾拂雲堂
東京市下谷區上野櫻木町二十三
電話下谷(83)一九六〇番

昭和12年２月「校友会会報」の広告

東京美術學校公認御用
高野洋服店
校内賣店に於て修繕及プレッシング致居候間御利用願上候
東京市赤坂區青山北町五丁目十六番地
電話青山(36)五七四一番
振替東京三二八八一番

靴の御用命は校内出張
公認御用 關口靴店
東京市神田區五軒町一番地
電話下谷(83)五四〇七番
振替東京四二〇一六番

文房具 圖案畫用繪具及材料 彫刻用塑造用材料
東京美術學校御用校内
靜一堂
出張所 東京市本郷區駒込千駄木町百〇三番地 相州鎌倉大町八番地

美校で使用品は何んでもある
昭美堂賣店へ
最も親切に勉強して居ります

東京美術學校第一生徒控所
御食事と喫茶は皆樣の第一食堂で
クラス會其他の集會にも御利用下さい
久保山商店

東京美術學校公認御用
武田洋服店
本郷區追分町六十番地
電話小石川(85)二三四番
振替東京二二二〇〇番

御食事と喫茶
東京美術學校
食堂の樣皆
集會所食堂
御會合の御好料理は特に勉強

洋食材料と繪具
佛國、巴里、ドルアン會社
日本、滿洲總代理店
淺尾拂雲堂
東京市下谷區上野櫻木町二十三
電話下谷(83)一九六〇番
振替口座東京三〇五一四番

昭和14年２月「東京美術」の広告

◆旧美術学部食堂（東京美術学校生徒集会所･旧大浦食堂）の建築について

○建築概要

所　　在	東京都台東区上野公園12－８ 東京芸術大学美術学部構内
竣工年月日	昭和８年10月14日
解体年月日	平成８年５月
構　　造	木造平屋建て 屋根構造：頬杖付きトラス組（喫茶室は和小屋組）
意　　匠	和洋折衷
延床面積	262㎡（79.3坪）
設 計 者	金沢庸治　東京美術学校建築科助教授
施 工 者	不明
外部仕上げ	屋　根：寄棟桟瓦葺き（瓦に三州高濱の刻印あり） 外　壁：竪羽目板張りペンキ塗 小　壁：漆喰真壁舟肘木付き
内部仕上げ	内　壁：腰壁／竪羽目板張りペンキ塗、内法壁／漆喰塗真壁 天　井：折上格天井、格縁ペンキ塗 窓　：引き違い 床　：クリンカータイル張り

旧大浦食堂内部

旧大浦食堂前

（特記なき写真は平成７年、８年前野研究室で撮影）

○経緯

・和田英作は昭和７年～11年の４年間東京美術学校長を務める。この東京美術学校生徒集会所は和田校長時代の昭和８年10月14日に建設される。美術学校一覧（昭和９～10年）に記事としての記載はないが、同誌の美術学校配置図の現在地に生徒集会所の記載がある。

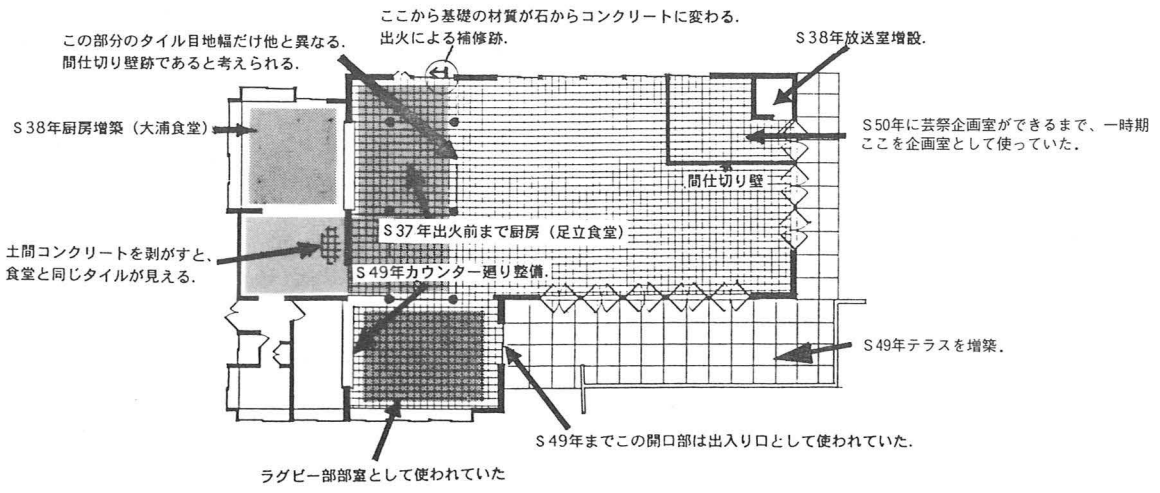
・天野正治（昭和７年美校建築科卒業）、今里隆（昭和24年美校建築科卒業）、大関徹（昭和12年美校建築科卒業）、清家清（昭和16年美校建築科卒業、元芸大美術学部長）、４氏への聞き取り調査によると生徒集会所の当初の用途は美術学校生徒の談話室兼クラブ室のようなものであったらしい。天野氏の記憶によると、生徒集会所の中にはしるこ屋があったと云う。大関氏の記憶では、和田英作校長が退職する昭和11年に生徒が講堂ではなくこの集会所に集められ和田校長の別れの辞を聴いたと云う。このことは、この生徒集会所が和田校長にとって特別な意味を持っていたからなのだろうか。

・昭和12年：生徒集会所は第二食堂（美術学校一覧、第一食堂は大黒天側、現在の彫刻棟西側にぁった。）となり、新橋の板前、大浦英一が食堂経営の権利を買い食堂を開く。この敷地一帯には梅林が有ったことから梅林食堂の愛称がつく。

・昭和37年：厨房から出火、厨房の一部を焼く。翌年厨房を西側に増築し食堂床を拡張した。北東隅のカウンター前４本の丸柱までにそれまでの厨房はあった。同時に食堂部分の南東隅に1.8m 角の放送室を大学祭用に設ける。

・昭和49年：喫茶室南側出入口撤去、窓に変更。在来ガラススクリーン移設し、下げ膳コーナーを設ける。南東の芸祭企画室として使われていたと言われる部分が撤去。喫茶カウンター廻り整備（ルーバー、吊戸棚、カウンターのケンドン戸とくぐり戸）。食堂部分西欄間在来ガラス撤去の上、新規並厚透明ガラスにする。パーゴラ、テラスと花壇を設ける。テラス屋根葺き替え。ペンキ塗り替え工事。

・昭和54年：ペンキ塗り替え工事。



○意匠上の特徴

この建築の外観は一見洋風に見えるが、柱頭に舟肘木を設け、内部天井に折上格天井を用いることなど、和風的要素が多くみられる。何故和風の意匠が用いられたのか、当時の美術学校の状況から考えてみることにする。

1）東京美術学校校舎の和風について

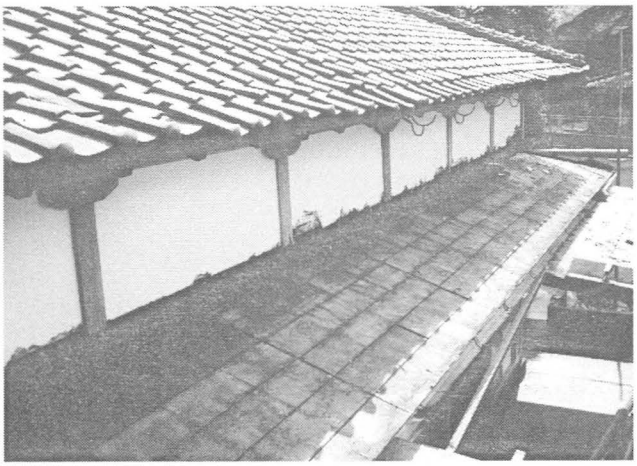
東京美術学校は明治9年竣工の教育博物館の木造洋風の建物を校舎として発足した。明治末年美術学校校庭を横断する屏風坂通り開通のため、その計画地に建つこの校舎を現在の美術学部中央棟の位置に移築することとなった（以下移築したこの校舎を旧中央棟と呼ぶ）。ところが、校舎の後部棟の移築が終わった時点で、残っていた正面棟が火災に遭い、旧中央棟の正面棟だけが移築未完となった。大正3年、鳥海他郎の設計で未完の正面棟が和洋折衷のデザインで完成した。この旧中央棟の玄関庇は円柱斗拱入母屋，講堂の天井は折上格天井であった。

2）六角堂の和風について

昭和6年9月23日に竣工した平櫛田中作岡倉天心像鞘堂、通称六角堂は舟肘木のある和風建築である。この鞘堂に和風が求められた理由は「岡倉天心先生が東洋美術の鼓吹者であった」ことによる。設計者の金沢庸治はそのことを受けて「藤原後期のものに多少近代味を加えた純和風のもの」を設計したと設計主旨を述べている。

3）正木記念館の和風について

昭和10年8月に竣工し、同年11月1日に開館した正木記念館も和風の意匠で設計されている。正木記念館は、正木直彦校長が明治35年から昭和7年に至る30年の長期にわたり、美術学校長として日本の美術教育と美術界に尽くした貢献を記念して建てたものである。建設実行委員長は和田英作校長である。和田英作は、「正木先生のご意



柱頭、船肘木

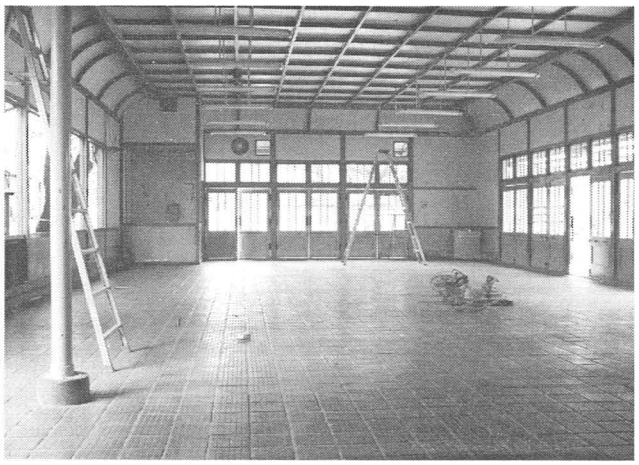
折上格天井

志に副って純書院造りの日本室を内部に持った耐震耐火の鉄筋コンクリート造り」とし、その設計を金沢庸治に依頼した。金沢は一階を展示場、二階に18帖の座敷と同面積の次の間のある書院を設計した。外観は城郭建築を思わせる物がある。

4）旧美術学部食堂の和風と構造について

外観は竪羽目板張りの柱頭に舟肘木を乗せる和風建築で、内部も折上格天井のユニークな和風建築である。この折上格天井の裏には頬杖付きトラスが隠されていて、この9.1mのホールの壁面を強化する働きを担っている。つまり、この折上格天井は単に和風の意匠上の問題ではなく、構造的な大きな役割と和風的表現との接点を果たすために選ばれたものであるとも云える。

この頬杖付きトラスの頬杖は、柱とトラスをつなぐばかりでなく、トラスの陸梁、登梁をもつなぎ、柱とトラスの接合点の水平力に対する弱点を強化したものである。このタイプのトラスは昭和初期に関東大震災の経験をもとに改良されたもので、昭和初期の耐震木造トラスの貴重な遺構である。（温品鳳治　東京芸術大学　名誉教授）



旧大浦食堂内部

解体中のトラスの様子

◆設計者について

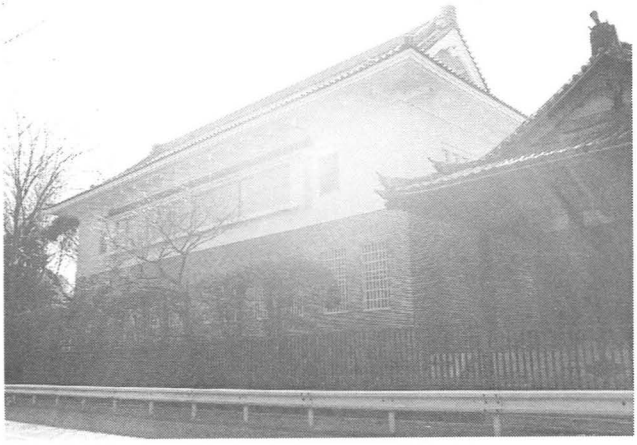
前項の天野氏、今里氏、大関氏、清家氏への聞き取り調査から、本建築の設計者は金沢庸治であると思われる。金沢庸治は建築当時、東京美術学校（現東京芸術大学）建築科の講師であった。大正15年に東京美術学校で設計製図、建築学、西洋建築史を教えていた岡田信一郎に望まれて講師として就任して以来、昭和19年まで（昭和11年からは助教授）20年間、勤務することとなる。

○略歴　「旧奉職者履歴書　五の六　一六一～二二二」から抜粋

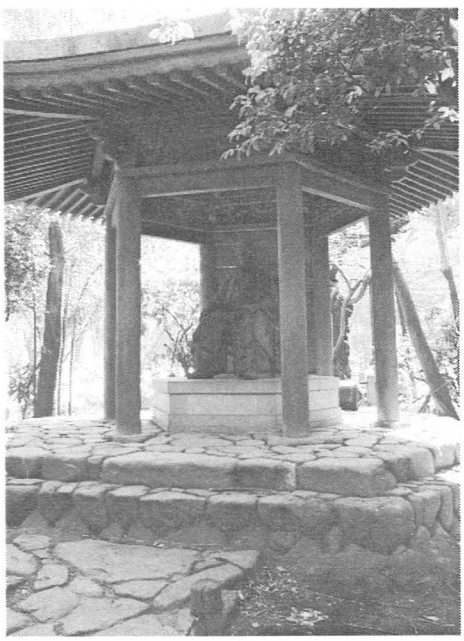
明治33年	3月15日	東京市本郷区駒込西片町に於いて生まれる。
大正８年	４月５日	東京美術学校建築科（図案科第二部予備科）へ入学。
大正13年	３月24日	同校建築科卒業（大正12年５月図案科第二部を建築科と改称される）。
大正15年	４月15日	東京美術学校講師として就任（建築科製図実習及び容器画法授業担任）。
昭和11年	１月８日	東京美術学校助教授。建築科勤務（建築製図及び図学授業を担任）。
		彫刻科及び工芸科兼務（図学授業を担任）。
昭和16年	11月１日	建築科理事。
昭和57年	11月22日	没

○学内主要建築作品

岡倉天心六角堂	昭和６年（1931）竣工
正木記念館	昭和10年（1935）竣工



正木記念館



岡倉天心六角堂

◆評価

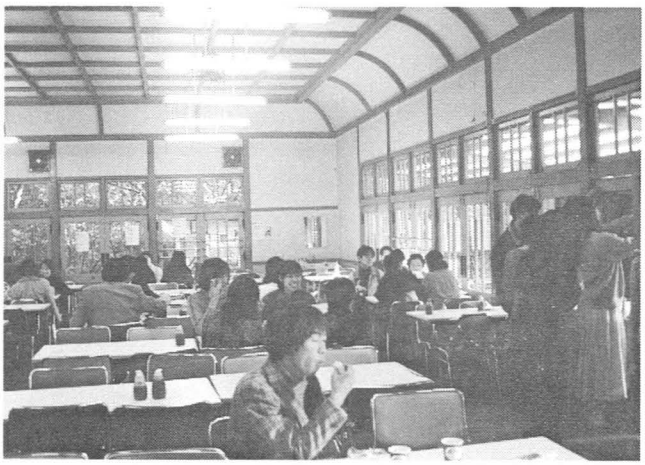
東京美術学校校舎、六角堂、は正木校長時代のもので、正木記念館、旧美術学部食堂は和田校長時代のものである。両者に流れている共通の精神は、フェノロサ、岡倉天心時代よりつづく日本とアジアの美術にこだわるもので、それが美術学校校舎の玄関廻りや講堂の和風デザインに表現されてきた。

一般に昭和初期の和風公共建築は、帝冠様式に代表される日本のナショナリズムの時代的表現と称されることが多い。しかし、美術学校の和風建築はそうしたものとは異なると考える。

この旧美術学部食堂の和風の表現は、一つには東京美術学校の伝統的な日本とアジアにこだわる精神と、関東大震災後の耐震を意識する木造トラスの接点として折上格天井の和風的表現が選ばれたものである。

大関徹（昭和12年卒業）の記憶による和田英作校長の美術学校生徒との送別会場となったことを考えると、旧美術学部食堂（生徒集会所）は和田英作校長の思いでのモニュメントでもある。

以上より旧美術学部食堂の建築は東京美術学校の精神的伝統と関東大震災後の耐震木造トラスと云う昭和初期の時代を反映した貴重な建築遺構と評価する。



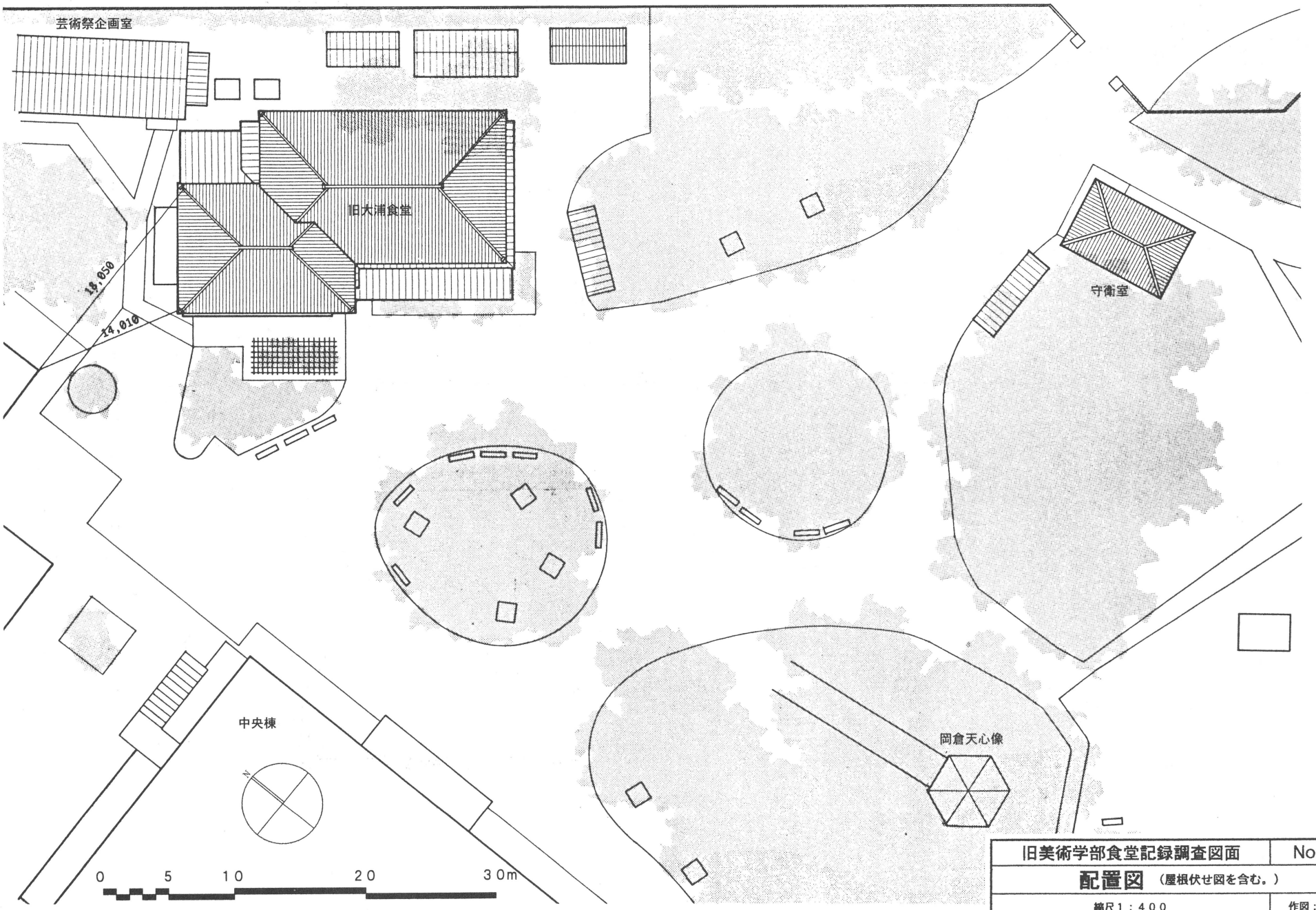
旧大浦食堂内部

旧大浦食堂前

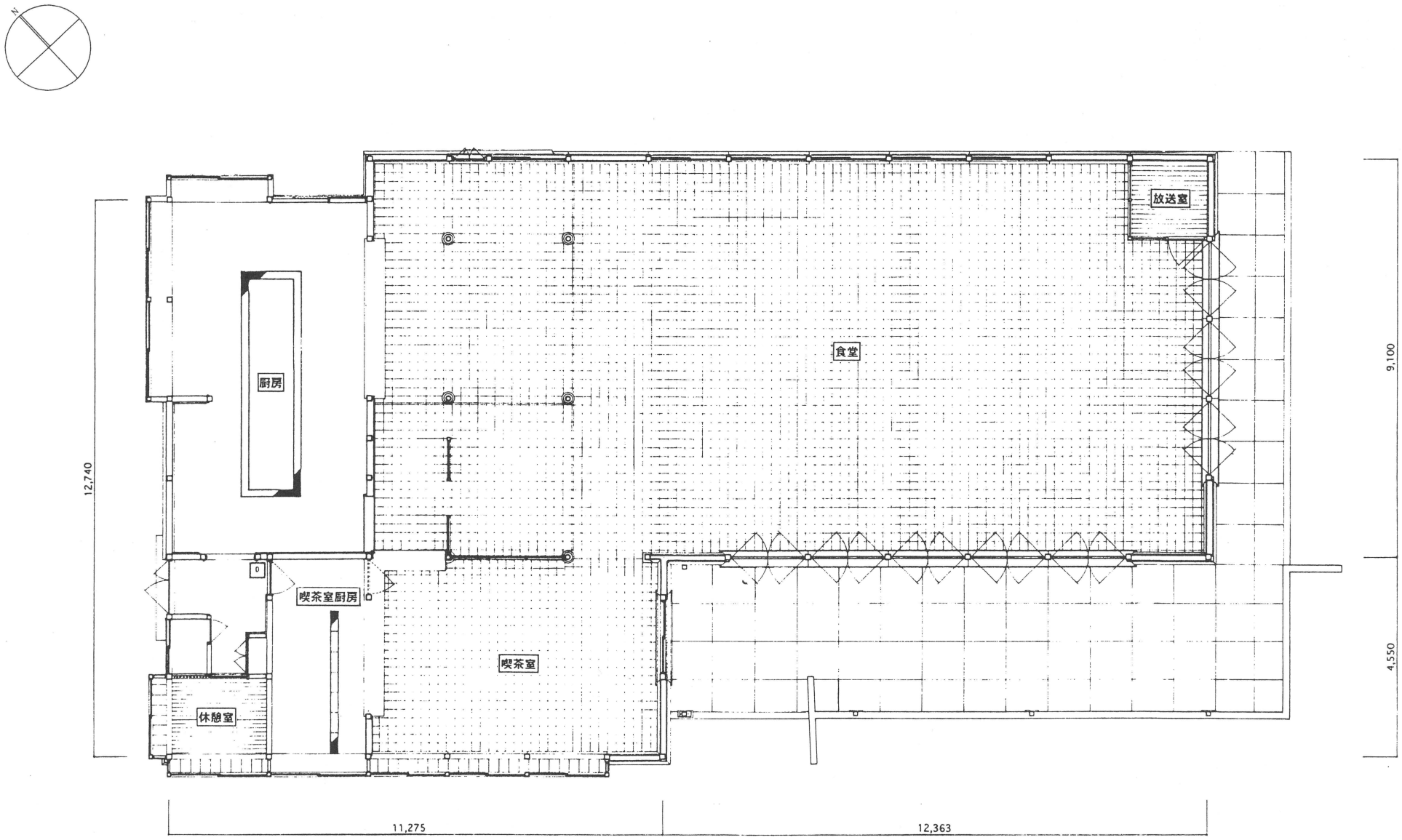
◆実測図面（平成８年５月の取り壊し直前の状況）

○図面リスト

図面番号	図面名	縮尺
1	配置図（屋根伏せ図を含む。）	1：400
2	平面図	1：125
3	西側立面図	1：125
4	南側立面図	1：125
5	東側立面図	1：125
6	北側立面図	1：125
7	南－北断面図（食堂東側展開図を含む。）	1：125
8	東－西断面図（食堂北側展開図を含む。）	1：125
9	食堂西側・南側展開図	1：125
10	喫茶室各面展開図	1：125
11	天井伏せ図	1：125
12	鳥瞰図	
13	俯瞰図	

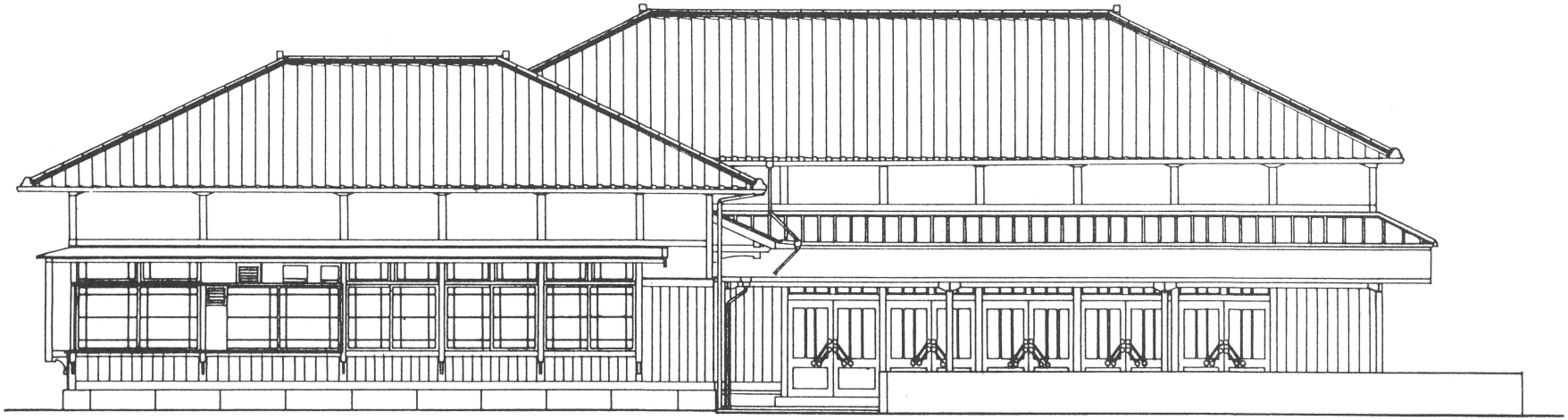


旧美術学部食堂記録調査図面	No. 1
配置図 （屋根伏せ図を含む。）	
縮尺1：400	作図：早川



0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 2
平面図	
縮尺1：125	作図：加藤

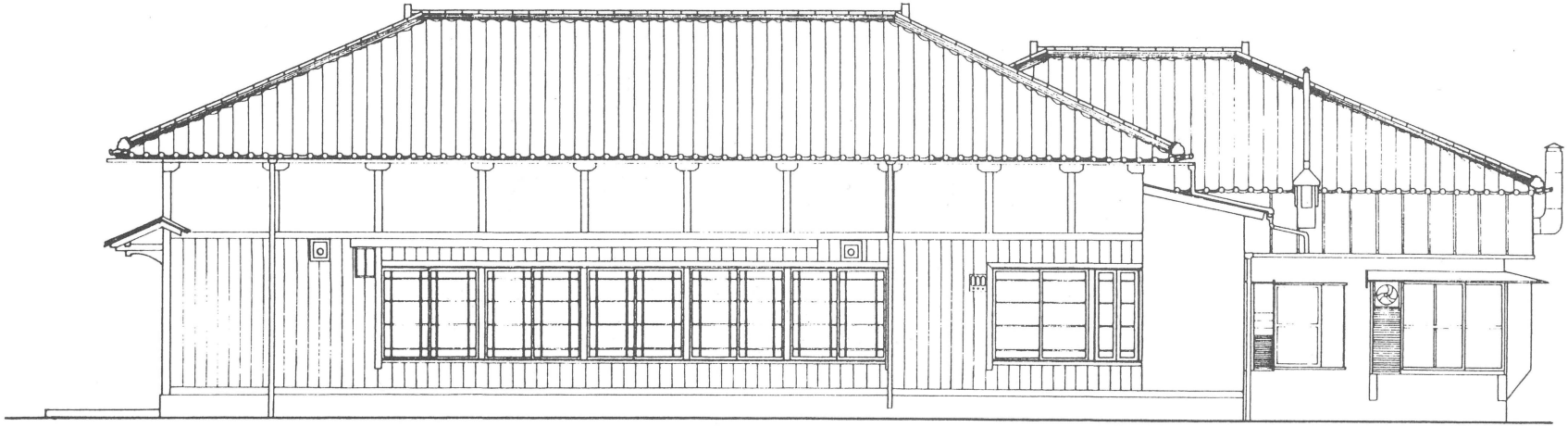


0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 3
西側立面図	
縮尺1：125	作図：佐久間

0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 4
南側立面図	
縮尺1：125	作図：北川

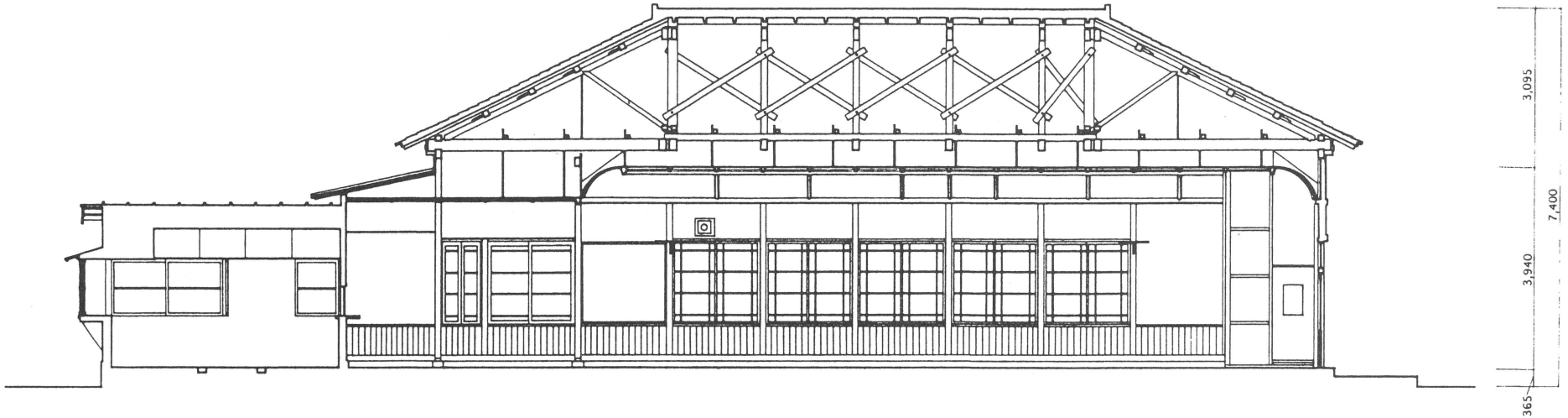


0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 5
東側立面図	
縮尺1：125	作図：北川

0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 6
北側立面図	
縮尺1：125	作図：早川

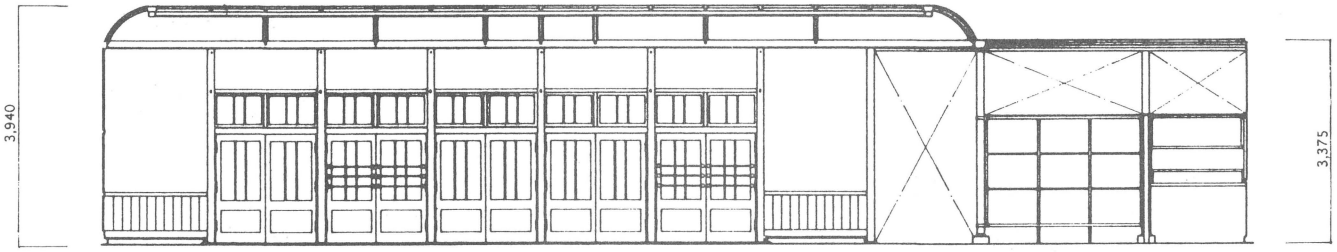


0 1 2 3 5 10m

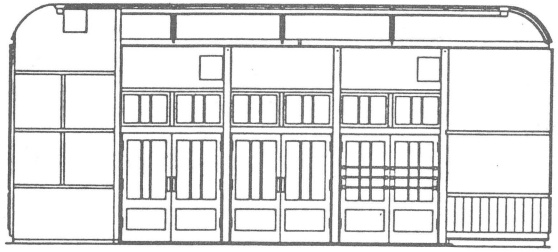
旧美術学部食堂記録調査図面	No. 7
南－北断面図 （食堂東側展開図を含む。）	
縮尺1：125	作図：市毛

0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 8
東－西断面図 （食堂北側展開図を含む。）	
縮尺1：125	作図：市毛



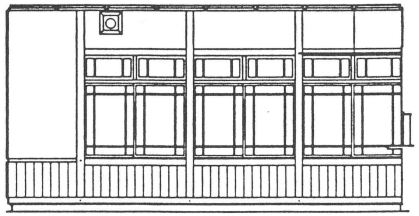
食堂西側展開図



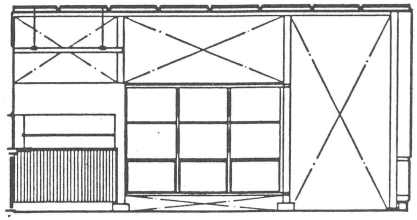
食堂南側展開図

0 1 2 3 5 10m

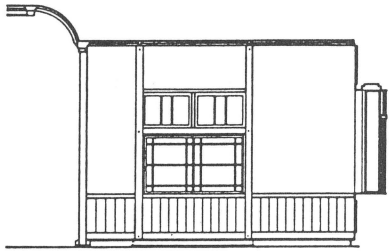
旧美術学部食堂記録調査図面	No. 9
食堂西側・南側展開図	
縮尺1：125	作図：加藤



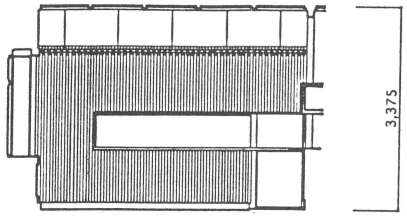
喫茶室西側展開図



喫茶室東側展開図



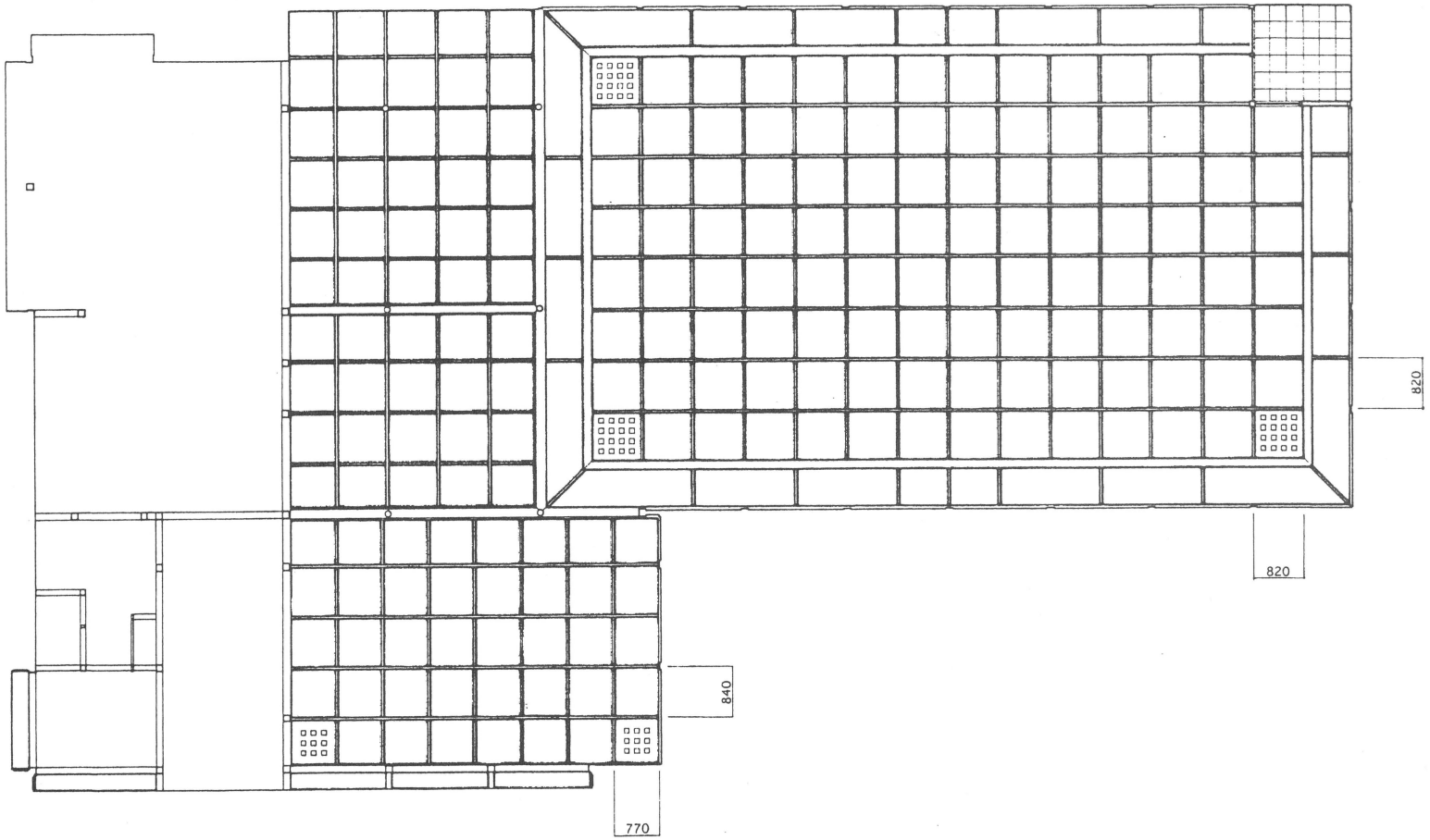
喫茶室南側展開図



喫茶室北側展開図

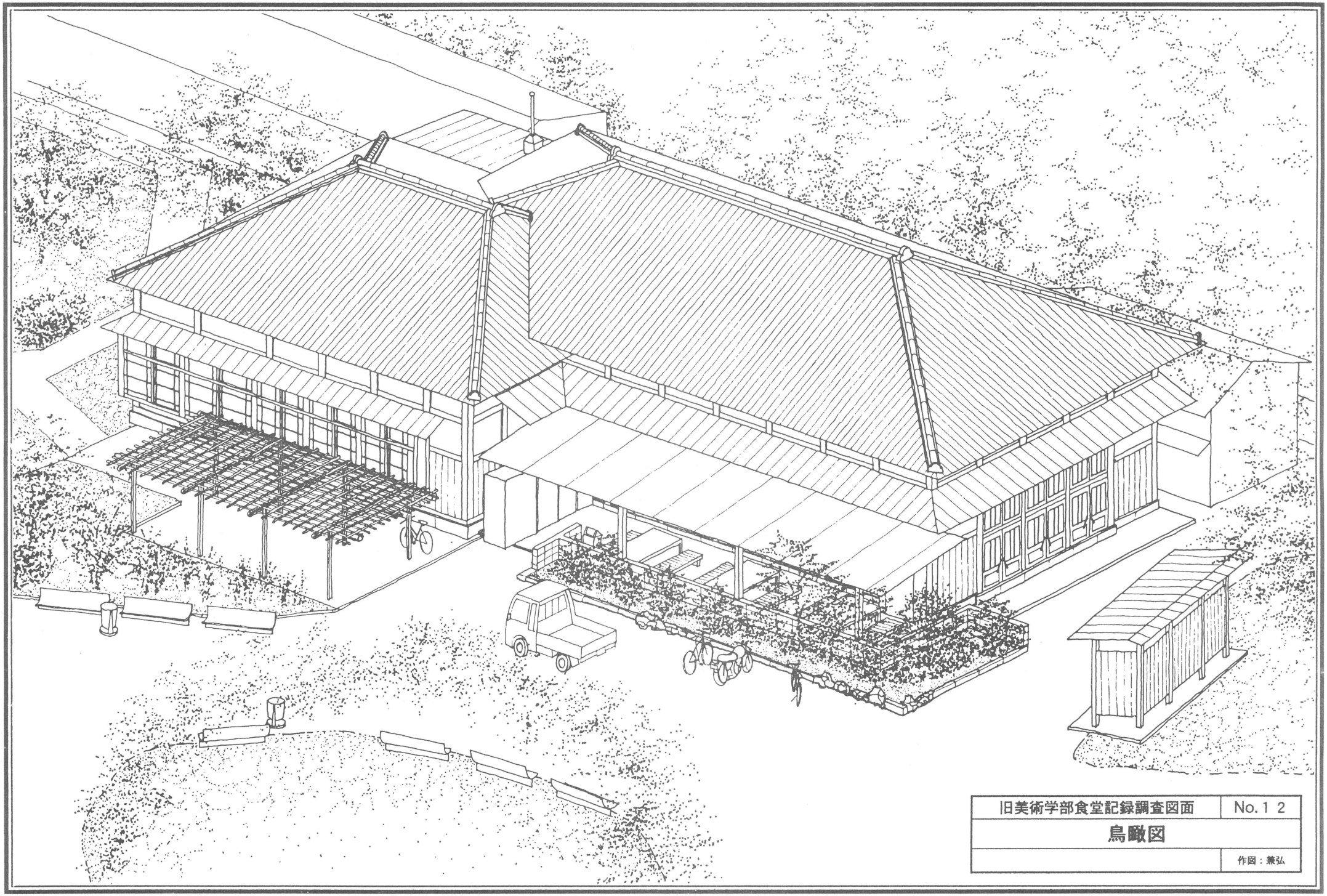
0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No.10
喫茶室各面展開図	
縮尺1：125	作図：市毛、加藤

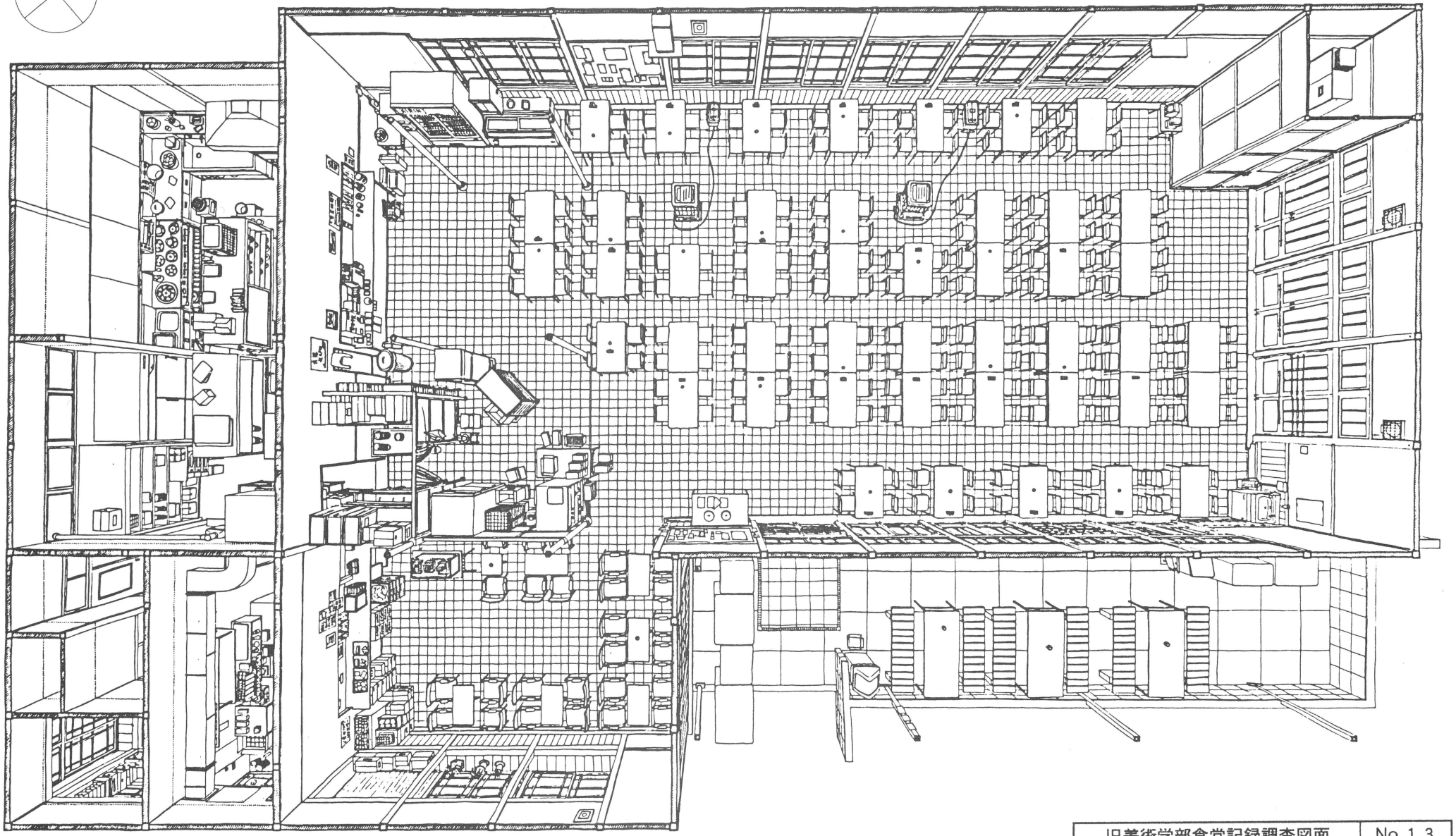


0 1 2 3 5 10m

旧美術学部食堂記録調査図面	No. 1 1
天井伏せ図	
縮尺1：125	作図：加藤



旧美術学部食堂記録調査図面	No. 1 2
鳥瞰図	
	作図：兼弘



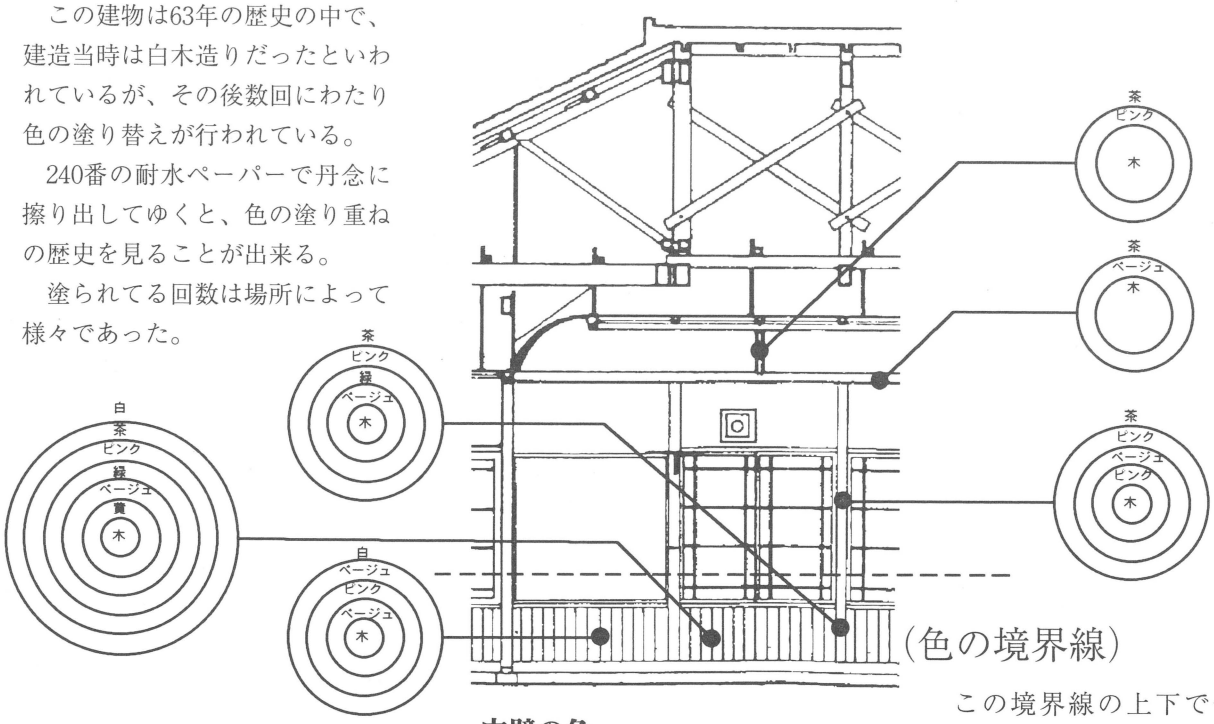
旧美術学部食堂記録調査図面	No. 1 3
俯瞰図	
	作図：加藤

◆色の歴史

この建物は63年の歴史の中で、建造当時は白木造りだったといわれているが、その後数回にわたり色の塗り替えが行われている。

240番の耐水ペーパーで丹念に擦り出してゆくと、色の塗り重ねの歴史を見ることが出来る。

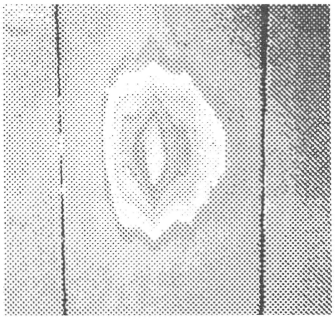
塗られてる回数は場所によって様々であった。



内壁の色

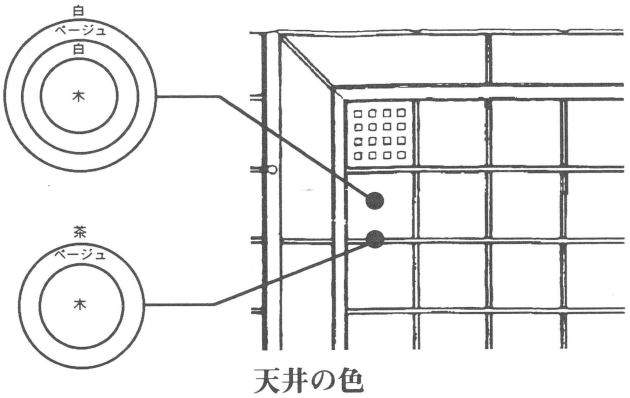
(色の境界線)

この境界線の上下で色の違ったツートーンカラーの時期があったと考えられる

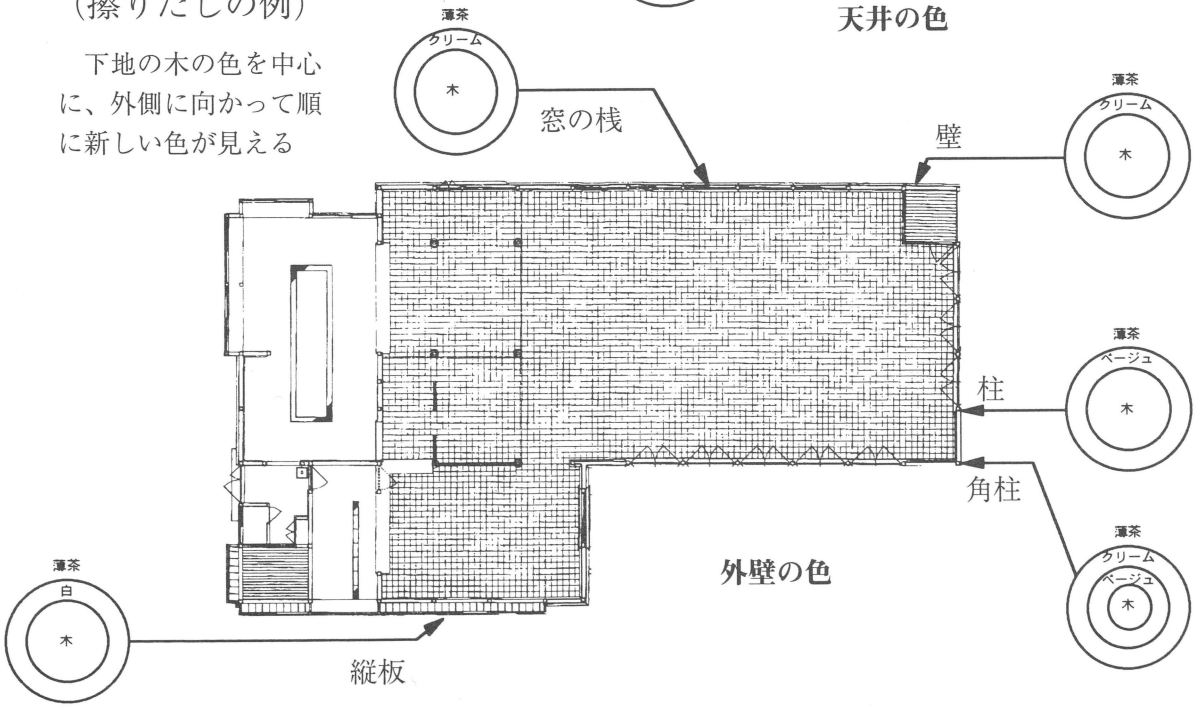


(擦りだしの例)

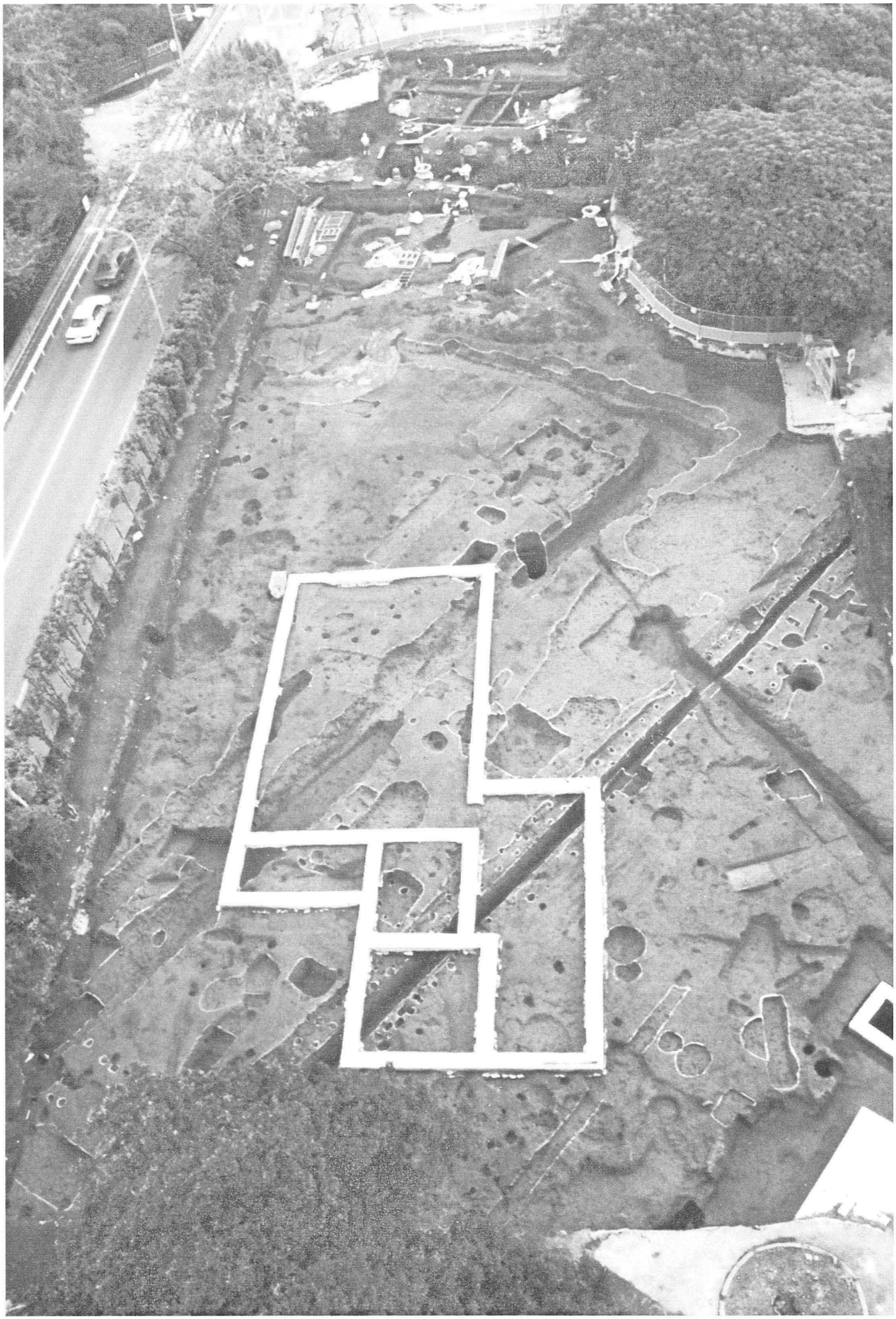
下地の木の色を中心に、外側に向かって順に新しい色が見える



天井の色



外壁の色



発掘調査区域全景と旧大浦食堂跡（絵画棟より）

◆美術学部構内の発掘調査：埋蔵文化財調査からの報告

発掘調査団／保存科学研究室　　山内利秋

芸大構内は文化財保護法上は埋蔵文化財を包蔵している土地、即ち考古学的調査対象としての遺跡でもある。上野忍岡遺跡群と呼称されるこの遺跡は、東京国立博物館・西洋美術館等上野公園内に点在する幾つかの調査地点からなり、ここ数年の公共事業に伴って調査が継続されている。

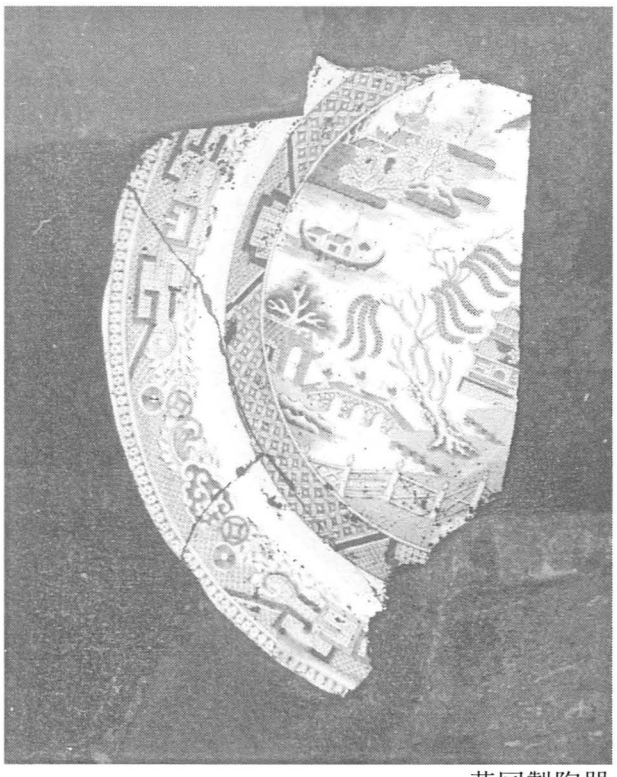
過去芸大では、音楽学部構内において附属高等学校地点、奏楽堂建設予定地地点の調査が実施され、中世後半から近代までの各時期の遺構・遺物が確認された。今回の調査も美術館新営に伴い実施されたもので、調査総面積は約2450m^2、調査が実施された期間は中断期間を含めて平成８（1996）年３月12日～同年10月12日であった。

調査地点は旧寛永寺子院群のうち東圓院の所在した位置にあたる。『東叡山寛永寺子院記』によると、東圓院は寛永17（1640）年に松平定綱によって創建され、当初は屏風坂上（上野駅と鶯谷駅の間辺り、現在のJR線上）にあったが、その後何度か移動し、調査対象となった場所へは宝永６（1709）年に移ったとある。近世以外の遺構では平安時代住居跡と近代の旧教育博物館／旧東京美術学校関連の遺構を検出した。

９世紀後半（平安時代）の住居跡は１軒が単独で検出し、土師器や緑釉陶器・帯金具が出土した。近隣の調査地点からは多くの住居跡が見つかっており、関係性が注目される。

近代の遺構では旧美校校舎跡があった。この建物は明治10（1877）年に旧教育博物館（現在の国立科学博物館）の施設として作られ、その後美校に移管したが、明治44

「通路」SF－１



英国製陶器

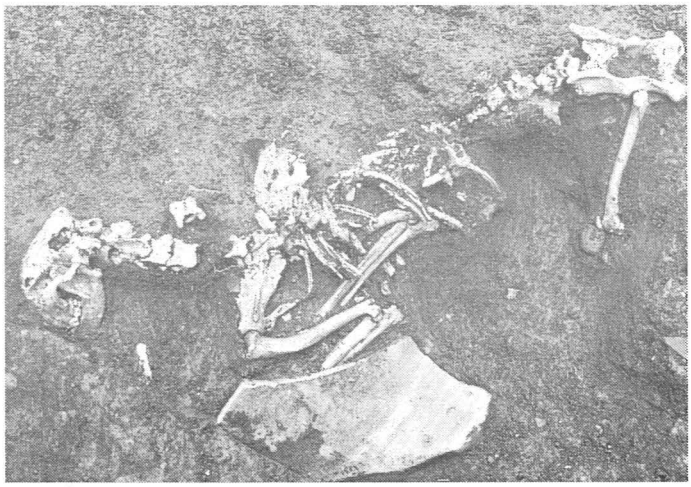
（1911）年の火災で焼失した。調査では消失時の屋根瓦・煉瓦を大量の焼土とともに検出した。煉瓦は昭和初期に建てられた職員宿舎の基礎部分に転用されていた。また「砂漆喰」によって壁面を固められた池があった。「砂漆喰」は明治25年前後から本格的なセメントに転換するので、これ以前に掘られた池である。さらに「明治三二年」の銘があるベルギー製の水道管を伴った水道施設があり、近年まで使用されていた。

近世の遺構は礎石のある建築物の痕跡は確認出来なかったものの、江戸各時期の溝、掘立柱建物跡、通路、並木跡、池、地下室があった。SD－10001と名付けた溝では、中層から男女２体の人骨が出土した。丁度桶のサイズに丸く収まっており埋葬されたものである。土地と土地との境界線にあたる溝から遺体が検出される例は、この時期では珍しい。

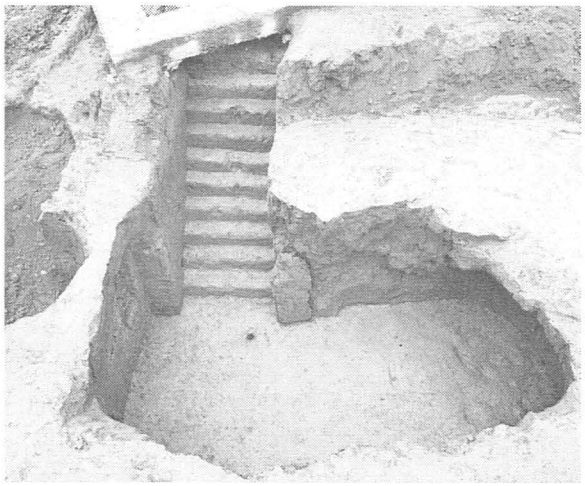
大浦食堂南端の接する所からは、地下室（ちかむろ）が検出された。江戸時代の貯蔵庫で広さはおよそ６畳間程度あった。天井部は土の崩落を防ぐ為にドーム状に整形されていた。

幕末～明治初期の溝 SD－10002は、幅約８m、深さ約4.5m をも測る大規模なもので、調査区の南壁面で東側に屈曲する。この溝からはイヌの遺体を５体検出した。遺構 SF－１は底面に直径30～35cm 前後、深さ５～10cm 程度の円形（乃至は六角形状）の掘り込みを無数に有し一見規則的に配列されているかにも見える。石が敷かれていたり、輪切りにした材を置いていたのかもしれない。この「通路」に沿って約10.5m 前後の間隔で樹木が植えられていた痕跡があった。調査区南端と隣接する所に現在でも樹齢最低300年以上と言われるシイの巨木があり、その延長線上にあたる音楽学部構内にも昭和40年頃まで同様なシイがあった事からこれらを連結した並木が存在したのだろう。「通路」周辺は庭園であったのかもしれない。

図書館すぐ脇からは幕末期～明治初頭にかけての池があった。堆積した土層の上層から中層にかけて一面に瓦が散布していた他、イヌの遺体を４体検出した。さらに、19世紀中葉の英国スタッフォードシャー産“ウィローパターン（柳の図柄）”が描かれた陶器が出土した。発掘調査の詳細は現在整理作業であり、いずれ正式な調査報告書等で公表する予定。



出土したイヌ遺体



旧大浦食堂脇の地下室

「上野の森の芸術家たち－東京芸大ちょっと聞けない裏話－」

齊藤仁著　PHP 研究所　1987年８月10日発行　より抜粋

大浦食堂のオヤジさん、おばさん

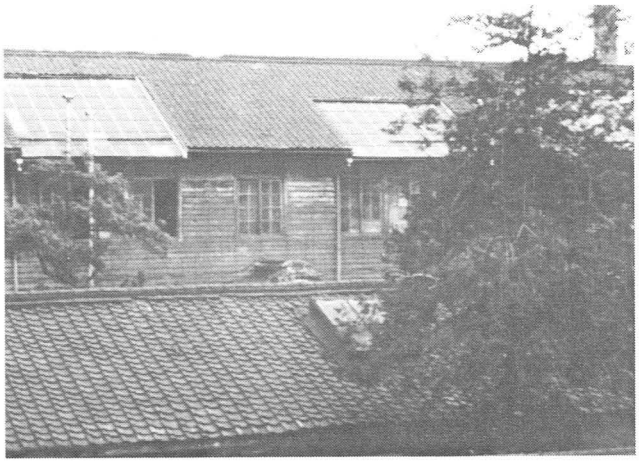
学生食堂をつくる

芸大の構内生活で忘れられないのは、大浦食堂のおじさんである大浦英一さんとおばさんのことである。

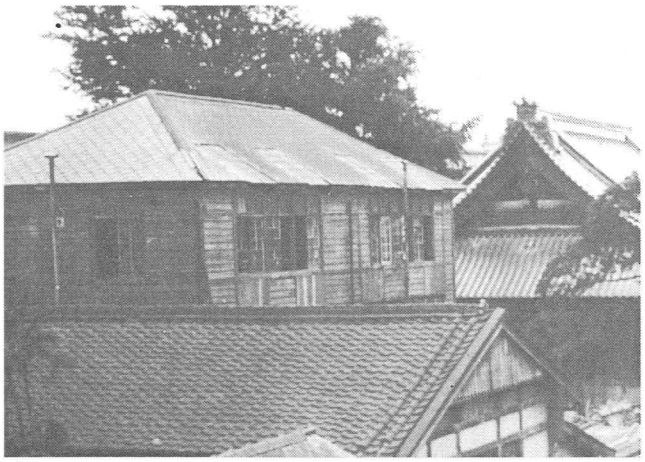
終戦直後の昭和二十一年から二十四年頃までは、悪性のインフレーションで、貨幣価値は下落し、食糧は遅配欠配が著しい時代で、主食であった米の配給など殆どなく学校の構内に自家製の文化住宅を造って生活していた。学生たちは芋の買い出しも自分たちでやり、なんとか、その日その日を食い、生きのびていた。だから米の配給制度はあったが、事実上、食堂の営業が成り立つ状態ではなかった。

戦後の学生は、住むに家なく、食うに食なく、着るに衣なくだった。自分の好きな芸術より、食べることと生きることで精一杯だったから芸術論などぶっているどころの場合ではなかった。ところが根っから絵や彫刻の好きな連中は、戦地へ行っても、絵筆がなければ鉛筆で絵を描いていた。彼等にとって我が故郷というのは学校だったのだ。その学校へ帰ってみても寝る所がない。そこで学内に住んでいた先輩、後輩が自分の所へ来いと言う。次々と移って来ては、適当に仕切って自分のねぐらをつくっていく。それで蜂の巣のようにできたのが文化住宅であった。

ひどい生活であったが、それでも昭和二十四年頃、俗に言う学生食堂ができた。大学には学生のために、生鮮食料品の配給、割り当てがある。しかし、いくら切符が発行されても受け皿になる食堂がない。そこで、中尾喜保と工藤喜代美という当時学生



「建築科裏手の古い建物群屋根越しに油絵教室を望む」
（昭和43年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）



「建築科裏手の古い建物群屋根上から大黒天方向を望む」
（昭和43年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）

であった二人が食堂をつくろうということになった。

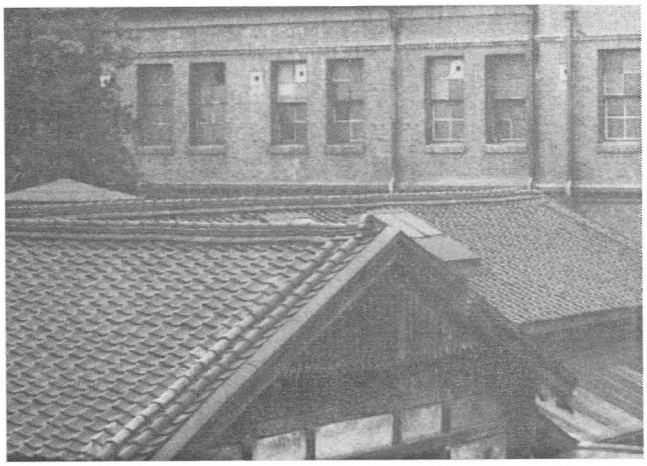
当時、学生であった中尾喜保氏は現在美術学部の美術解剖学講座の主任教授であり、終戦当時は陸軍大尉であったが終戦と同時に復員し、図案科の学生として入学され勉強しておられた。工藤喜代美氏は彫刻科の塑像部に在学していた。空手が強くて、身体が大きい気迫のある実に明るい学生であった。二人は、当時、旧帝国美術院の建物で、学内居住者は誰もが「ラグーザー」と呼んでいた木造の建物の中に仮住まいしていた。

早速二人は、すでに戦前から東京美術学校で食堂を経営していたことのある大浦のオヤジさんとおばさんに来てもらうことが一番いいということになり、当時東京美術学校の学生課長でもあり、予科長でもあった西本順先生とも話し合って、学校側の同意を得て、文京区の根津に住んでいた大浦さんを訪ねて了解を求めた。

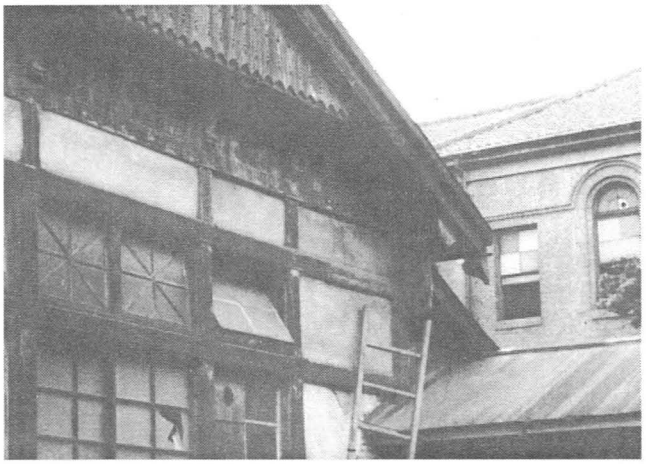
その頃すでにもう一軒の食堂が、戦前梅林食堂と呼んでいた現在の大浦食堂の建物内に入っていて、足立食堂と呼び学生食堂の役目をしていた。学生たちは米の配給券や現物の米を預けておいて飯を食べていた。両食堂は、大学ノートに個人別に口座をつくり“誰は今日、何食分食べた”と記録して過不足が分かる仕組みになっていた。この足立食堂がある日突然ボヤをだして、ついに休業に追い込まれ、頼りは大浦食堂ただ一軒だけになってしまった。

大浦夫妻が食堂のきりもり

大浦のオヤジさんは、戦前（昭和二十一年以前）、京橋の魚屋（従業員が約百人もいた）の大番頭をしていた。やがて、嫁をもらって店を出したいというので、その魚屋さんの奥さんが世話してくれて、おばさんと一緒になった。結婚した年（昭和十二年）に、芸大の構内にあった梅林食堂の権利を五百円で買い、食堂を開店した。それ



「建築科裏手の古い建物群を油絵教室（２階）から見る」
（昭和43年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）



「美術本館　旧大浦食堂（旧売店廊下）」
（昭和43年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）

から、だんだん戦争が激しくなってきたので、やむを得ず閉店してしまった。

大浦のオヤジさんは、ある事が機縁で、大屋政子さんのご主人であった帝人（帝国人造絹絲）の社長の大屋晋三さんに非常にかわいがられており、終戦後しばらくして大屋さんから話があり、

「資金を出すから、どこかに料理屋を開いたらどうか」

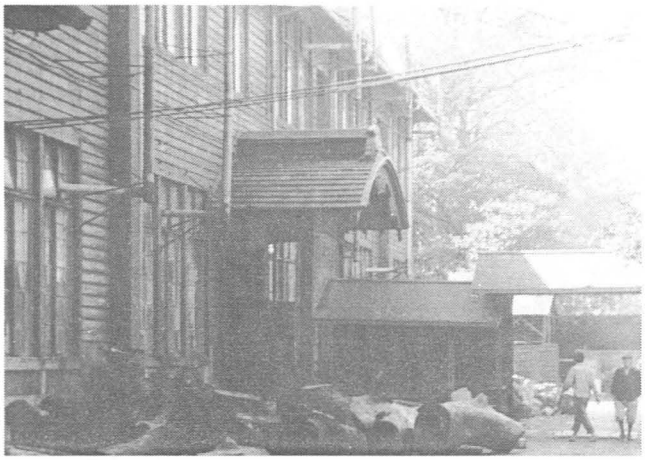
と言われたので、オヤジさんとおばさんは、二人して一生懸命に適当な店はないかとあちこち探してみたが、なかなかいい条件の店がみつからず、易の専門家に占ってもらったら、「今あせって無理して決めてもうまくいかないよ」という卦が出たとのおばさんの話だった。そこで二人はあきらめていたところ、学校の方から是非にということになったので、もといた東京美術学校へ、戻って来ることになったとのこと。

大浦のおばさんは、旧姓を小林といい、名前を郁子といった。愛知県岡崎市に近い北山村の村一番の資産家の娘として生まれた。おばさんは女だけの五人姉妹で三女。自分の生まれた北山村で二年間みっちり裁縫の稽古をして名古屋市に出た。

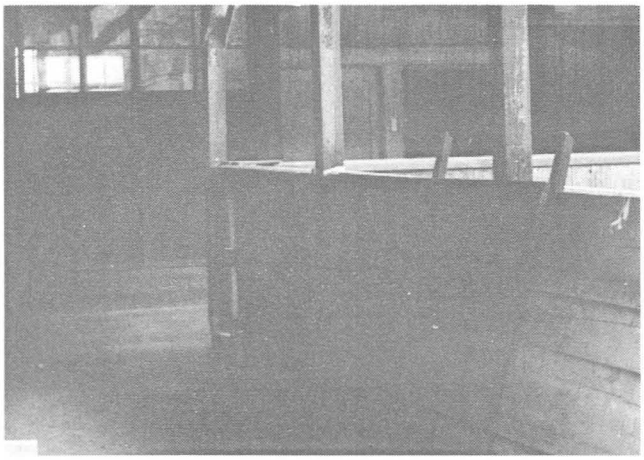
そこで松坂屋の下請けをしていた、お針子さんが約三十人いた呉服屋で七年間修業し、日本一のきものの仕立屋になるつもりで上京して来たそうだ。

最初は妹（四女）のマサ子さんが住んでいた現在の上野駅に近い家の二階を借りて、裁縫の先生を始めた。生徒も約十人ほど集まり、それで暮しを立てていた。その頃、たまたまオヤジさんのいた魚屋の奥さんから、大浦英一さんを紹介され、結婚することになった。おばさんが三十歳、大浦のオヤジさんが三十四歳のときだった。

大浦さん夫婦は学内にあったもとの学生集会所の奥を間仕切ってそこに住み、食堂のきりもりをしていた。当時ふたりの娘さんはまだ小さかったので、毎日私の所へ遊びに来ていた。私の家には昭和三十五年に芸大の日本画を卒業した弟が同居していた。この弟が勉強の面倒をみたり、妹が身の回りの世話をしていた。オヤジさんとおばさ



「美術本館右側大通り（正面渡り廊下、右売店）」
（昭和39年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）



「旧売店廊下」
（昭和43年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）

んが、朝早くから夜遅くまで休みなしに働かなくては当時はやっていけなかった時代だった。だから時には、夜遅くなり、娘さんたちは眠くなってそのまま寝てしまったこともあった。

魚とか野菜の仕入れは、中尾先生と工藤さんの二人が交代で殆どやっていた。午前中は授業に出て、午後から配給品をもらいに行っていた。これは献身的奉仕。今でいえば社会奉仕（ボランティア）だった。なかには、食堂で皿洗いのアルバイトをしてオヤジさん、おばさんを手伝っていた学生もいた。油画家の吉田俊雄先生などもそのひとりであった。

あとで分かったことだが、シルクロードで有名なあの日本画の教授である平山郁夫先生も、大浦食堂に大分借金をしていたらしい。いつか、おばさんの家を訪ねたら平山先生の絵が玄関に無造作に飾ってあった。私が、

「おばさん、この絵は、今、何千万円もするものだよ」

と言ったら、目を白黒させてびっくりしていた。

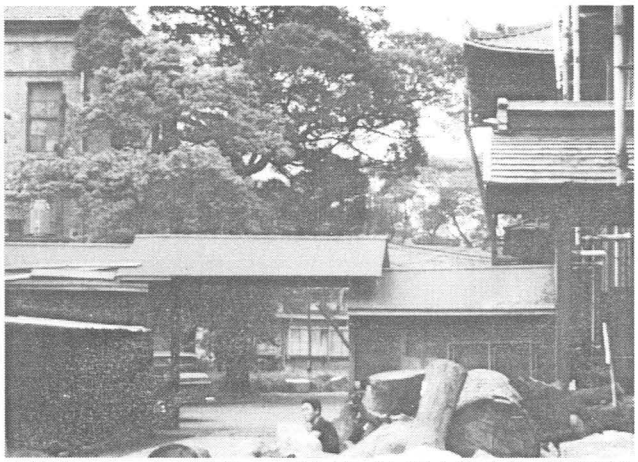
大浦食堂では飯の食えない学生たちを何とか食べさせていたのだ。借金のかたに絵や作品を置いていった学生も多かった。平山先生はもう昔のことなので忘れているだろうが、絵は無名時代の立派な作品で、まだ先生の作品歴（リスト）にも載っていないものだ。

食堂は学生の胃袋をまかなう所だから、みんな世話になった。戦後の美術学部の卒業生だけでも六千五百六十一人、このうち殆どの学生が大浦のおばさんを知っているはずだ。

オヤジさんは、職人気質の人で非常に短気でやせた人だった。オヤジさんは一流の魚屋で長い間育ったせいか、なるほどなと感心させられたことがある。

「料理の味は買って食うお客の口にあわせて作るものだよ」

といつも言っていた。食堂で学生が並んでいる所へ割り込もうとすると、たとえ職員であっても「気に入らん」と列の後ろへ並ばせた。ただ悔しいことに。昭和三十九



「美術本館　右側出入口、渡り廊下と旧大浦食堂、建築科」
（昭和32年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）

「美術本館　建築科　遠望（通路反対側屋上より）」
（昭和43年　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）

年一月二十九日、戦前戦後の疲れがもとで病気になり、現在の根津にある友愛診療所で亡くなってしまった。惜しいオヤジを亡くしてしまったなと思い出すたびに残念でたまらない。

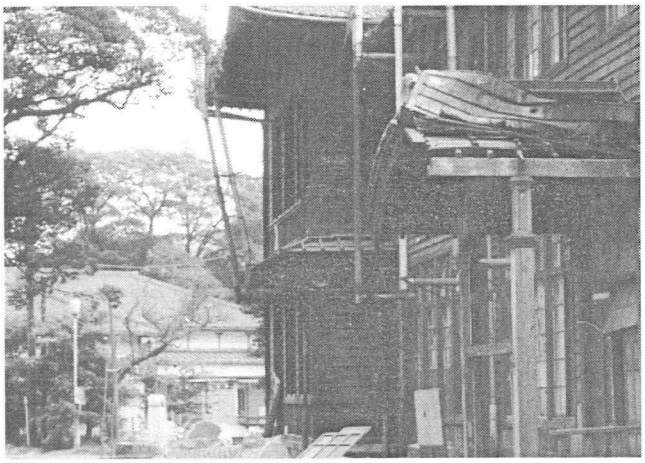
二十五貫の肝っ玉かあさん

おばさんはその頃、八十キロを越すような、やせた人から見たら羨ましい巨体を持つ女性だった。昔は二十貫でぶと言われていたが、二十五貫はあっただろう。当時子供をふたり乳母車に乗せて押しているのを後ろからみると、おばさんの体があまりにも大きいので乳母車が隠れてしまって見えないほどだった。やせたオヤジさんとは非常に対照的だった。オヤジさんもおばさんの後ろにいると見えない。だから借金取りが来ると後ろに隠れていたことがあるそうだ。

おばさんの暗記力とお金の計算は凄かった。学生が大勢テーブルに座り、いろいろなものを食べても、すぐいくらと計算が出来た。これは、おばさんにしか分からない記号を使っていた。何時、食堂に来て何を食べたか、というのが記号で書いてあるから誰もごまかせなかった。おばさんは恐らく仕立屋をしていても、きっと立派に成功していたにちがいない。オヤジさんと死別してからは、女手ひとつでふたりの子供を育てながら、食堂を切り盛りしてきた。今、ちょうど七十八歳。私の所へよく遊びに来ていた娘ふたりは、お嫁さんにいったが、今なお、おばさんを助けて営業を続けている。おばさんは現在は社長だ。

私はある時、相談されて経営上の損益の分岐点をソロバンで計算したことがある。学生食堂というのは十二カ月間稼働することが出来ない。芸大の場合でも授業は一年間が約三十週一週間を七日と計算してみても、まじめな学生が日曜日まで登校したとしても二百十日。だいたいは百八十日になる。これは一年を三百六十日として半分し

「美術側　正面中央広場から大浦食堂を見る　降雪」
（昭和46年１月　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）



「美術本館　右側面　出入口飾門を遠望」
（昭和45年７月　田中芳郎撮影　芸大資料館所蔵）

か勉強していないことになる。それに春と夏と冬の休みがある。

これでは一年のうち半分しか営業が出来ないことになり、経営は成り立たない。そこで隣りの都立上野高校の生徒や、一般の人たちに利用してもらい、家族経営で営業しているからこそ、なんとか成り立っているわけだ。大学側は定期的にメニューを出させて、飯はいくら定食はいくらと指示している。指示されても学校の学生だけ相手ではとてもやっていけない。

戦後開店早々の頃はしばらくは、飯だけ炊かせて、食堂に置いてあるソースや醤油をかけただけで食べてしまう学生がいた。これでは、経営など成り立つはずがない。せめて誰かみそ汁をとるとか、一品ぐらいはおかずを食べ、一日一回は牛乳ぐらい飲んでくれなくては無理だ。それに、学生食堂は、学生の集会所だから、学生は何時間でもいる。追いたてをくわないからだ。

だから芸大の美術学部にとっての裏方師として、みんなが一番世話になったのが、この大浦食堂だ。二、三年前のことだが、オヤジさんとおばさんに面倒をみてもらったラグビー部の卒業生が集まって、今は亡きオヤジさんの写真を飾って、おばさんを励ます会を食堂で開いてくれた。戦後の苦しい時代に、大浦食堂に米をたのんでやっと生活してきた連中も、今ではそれぞれ立派に一人前となり出世して社会人や芸術家になっている。

卒業生と大浦食堂とは、切っても切れない目に見えない縁で結ばれている。

音楽学部にあるキャッスル食堂の福本豊さん一家も、大浦食堂と同じく音楽学部にはなくてはならない食堂で、どんなにか大勢の音楽家の卵を世話し、めんどうをみてくれたことか。

人の出会いとは目に見えない「運命の綾糸」のようなもので結ばれているのではないだろうか。

プレハブ食堂の内部（平成９年）

プレハブ食堂の外観（平成９年）

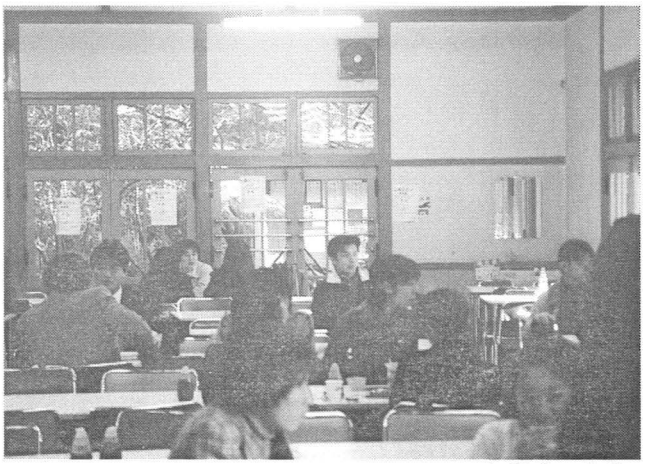
◆卒業生の想い出

中山正人氏（昭和８年図案科入学）に聞く旧大浦食堂に関するインタビュー
（平成９年２月キャッスルにて）

ちょうど僕が卒業する頃に食堂となったが、それまでは（S８年から12年まで）学生ホールだった。水谷武彦が留学先から戻ってきてここで（学生ホール）で「バウハウス」の帰国講演会をした。光、影について等、今まで聞いたこともないようなことばかりで学生にショックを与えた。当時、食堂は大黒天側の建物にあって（旧大浦食堂ではない）学生ホールにはお汁粉屋もあったけれど高いから行かない。お汁粉を食べるくらいなら皆、御飯を食べるという時代だった。欠食学生には「郷里からお金を送ってくれた時には酒を飲む前に少し飯代を置いてゆくんだよ！」といってタダ飯を食わせてくれた。御飯は茶わんでなく小さなおひつに入っていて飯だけなら５厘。朝飯は４銭５厘。たのめば晩飯もあった。その頃、桜木町（今の上野桜木）の店で牛丼を食べると10銭で、これは相当な大金であった。授業料が年間80円。校友会費６円を足して全部で86円というのを覚えている。給料は月５円くらいだったから、いかに授業料が高かったかのがわかる。国立（大学）の授業料は私立より高かった。これが逆転したのは戦後から。梅林食堂（旧大浦食堂のこと）は当初、ペンキを塗っていなく白木のままで、木を削っちゃってる人もいた。足立食堂時代の話では、建築科の建物や本館にはランプがなくて居残りが出来なかったけれども食堂にはあったのを覚えている。僕たちの学生時代はよく遊びもしたけれどそれでも毎週、作品提出があってそちらの方も熱心だった。モデル代と燃料費が高くてそのお金を捻出するのも大変だった。

食べることと作品をつくることで皆、一日が終わっちゃう。そんな時代だったけれども皆、純粋で正直だった。

カウンター付近の風景


夕暮時の食堂

大沼映夫美術学部長（昭和31年油画科入学）に聞く旧大浦食堂に関するインタビュー
（平成９年２月21日　美術学部長室にて）

大沼：僕たちの頃は食堂に米を預けることになっていて、そうするとわりと安い値段で食べることができた。といってもカツ丼くらいだったけれど。そのカツ丼がどうしてあんなに叩いて薄いのか、芸術的だった。米の貸し借りも学生同志でやっていた。キャッスルは今でもアルバイトをしている学生がいるけれど、地方から来た学生がアルバイト（皿洗い）で何人か働いていたのを記憶している。

聞手：取り壊しになった大浦食堂にはその頃、梅林（足立）と大浦の２つの業者が入っていましたよね。

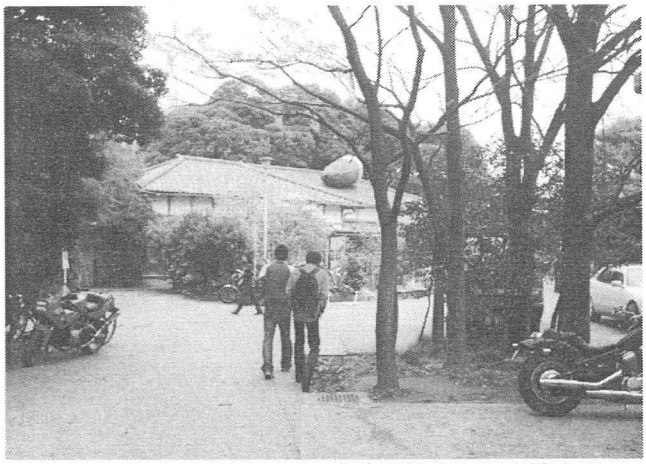
大沼：学生が梅の木を見ながらモンドリアン的な絵を描いていたのを覚えている。食堂が２つあるので梅林食堂につけがたまると大浦食堂へ行く。よく梅林のおばさんに「なんでそっちで食べてんの！」なんて友人が怒られていた。

聞手：想い出のメニューは何ですか？

大沼：カツカレー。僕は梅林食堂の方でよく食事をした。大浦の方が家庭的、田舎的で梅林の方が洋風というかどんぶりと皿の違い。大浦食堂のバタ丼のことをバタ丼といわずに「マーガリン丼をくれ。」といっている先輩もいて「バタ丼や！」と怒られてた。

聞手：一番好きな空間はどこですか？

大沼：当時はテラスはなくて、そこでサークル勧誘をやった。僕は野球部だったけど、ただ大声をあげるだけでなく歌をうたったりした。席を増やすためにテラスをつくったことで閉鎖的になったと思う。なんで日本人は箱庭的にしてしまうのだろう。学校というのは何かをしなくてはならないのだろうけど放っておいていいものとそうじゃないものがあるんじゃないかと思う。ドアも全部開いてい


中央棟脇から旧大浦食堂へ

旧大浦食堂内部

て開放的な空間が好きだった。
僕たちの頃から始まったんだけれど、三芸祭（金沢、京都、東京）のスポーツ交流があって（今の四芸祭）、その時には集まりをここでやったのを覚えている。教官になってからは入試の打ち上げコンパなどでよく利用した。あの頃は手伝いで学生を動員するので食堂を使ってみんなに飲ませた。今では人数が多すぎてなかなかできないんじゃないかな。給料がもらえるのですぐに帰っちゃうだろうし。

聞手：食堂のオヤジさんやおばさんの想い出はありますか？

大沼：大浦の娘さんは子供の頃から知っている。名前は知らないけれど。おばさんは親しみ安いなかなか貫録のある人だった。梅林のオヤジさんはものすごく将棋が強かった。オヤジさんが強かったのか僕が弱かったのか、手も足も出ずそれ以来将棋が嫌いになった。梅林のオヤジさんにはいつも野球の報告をした。運動の学校ではないのでユニホームを着て食堂に行き、みんなに見せるのが誇らしい。一度も勝ったことがなかったけれど、おばさんに「また負けたんでしょ。」と先に言われるので「参加するだけがいいんだよ。」なんていっていた。僕がいなくなってから優勝しだした。

聞手：食堂は音校の学生も含めて交流の場所だったとよくいわれますが・・・。

大沼：昼食の１時間は楽しみだった。油画科なんか男しかいなかったし、授業は（出席カードに）名前を記入して友達に預けて出すだけだから女性とのつながりもないし、食堂が学生の社交場のようなものだった。ここぐらいしか他の学生と会えないからここへ来て「やあ」という感じ。音校の方は遠いのでなかなか行けるところではなかった。今でこそ美術（美術学部）の学生は服も洒落ていて個性的だけれども昔は汚いジャンパーとかだった。建築、デザイン、芸術学の学生はしゃきっとしていて我々とは違っていたけれど。美校と音校は貧乏人と金持ちのようで階級があるかと思った。音校の学生で食堂に来るのは相当勇気がいるのではないかなぁ。当時はあまり来なかった。煙たがっていたかもしれない。

聞手：最後に大浦食堂への想いを一言お願いします。

大沼：ただ単に食事という感じでもなくアトリエと同じような感覚でごくごく自然なかたちで自分たちの共通の場所だった。取り壊しに反対があったことも不思議ではない。昭和の建物だからといってどんどん壊したならば昭和の建物がなくなっちゃう。もうちょっと手を早く打てなかったかなあ。壊れてから言ってもしょうがないけれど。僕でも学生だったらやっぱり反対していたのかなとも思う。こんなこといったらいけないか。立場上、どう納得してもらい取り壊しに持っていけるかを考えた。一番感動したのは取り壊しの時に学生が全体を作品化したこと。作品の素材として活用していただいたことがとても感動的だった。

工芸科鍛金　宮田先生（昭和41年入学）と助手の柿崎先生（昭和55年入学）に聴く旧大浦食堂に関するインタビュー　（平成９年２月20日プレハブ食堂にて）

宮田：自分の田舎（佐渡）の家は、200年あまり経っているらしいが、しっかり建っている。そのためには、手入れはいつも必要だったが、基本の建物がしっかりできていた。たとえば、柱に使われている材木は、その材の育った方位にあわせて使っていた。さらに佐渡の厳しい北風に対して植林されたものを北面に使うなど、自然との関係を考えて作ってある。

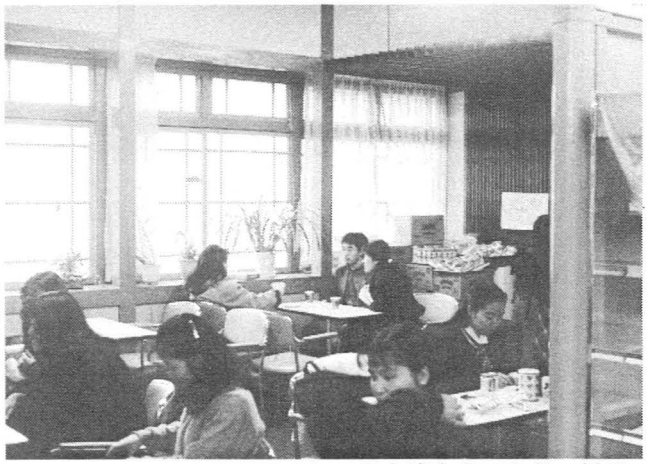
大浦を考えていたら坂東の匠（関東の職人）の建物は、自然の厳しさを忘れてつくっているんじゃないかと思ったね。デザインが悪いとか施工がなんだとかでなく、もっと単純な「もの」の価値というものが何であるかを考える必要性を感じた。また、オリンピックの64年に18才で上京した頃、アベベの走る東京を見て、まわりのものすごい変化が、壊して新しくつくるものだという錯覚に陥ったことを思ったなぁ。

柿崎：これからは、どんどん新しくつくるだけでなく、いいものをつくって大事にすることも必要だね。それから、大浦って、昭和８年から平成８年までの芸大生が必ず行ったはずだから、何か共通の認識をみんなが持っているような気がする。

宮田：だから大浦は、自分の原点に帰れたりして、みんなの郷愁をよんだりしたんだろう。

２浪して入学し、大浦でカレーやＡ定食の食事ができることがうれしかったね。あれから30年、カレーはその後は食べてないけどね。それから大浦で合格の電話をかけるうれしさ、当時は大浦の中しか電話がなかったから、発表を見

保存された本館入口



旧大浦食堂の喫茶の様子

て黄色い紐をまたいで大浦に電話をかけに行ったのは忘れられないね。あと、初めて音校生とお話ししたのも大浦だぜ、キャッスルに行くのは恥ずかしかった。最近は、しじみの味噌汁のダブルを飲み、肝臓の御自愛をして酒をぬいて仕事場へ行く。そんな日々かな。

柿崎：大浦って「そこに行けばあいつに会える。」という感じで、鍛金でいう鞴祭（ふいごまつり）に通じる。なんか休まる不思議な空気があった。科を超え時間が止まったような。これからできる学生食堂もそういう風になっていってほしい。

宮田：本当だね。あそこに行けば誰かに会える。空気は、母の胎内のような包み込む優しさがあった。特に俺は、大浦の格天井が好きだったなぁ。まるでお寺の本堂の天井とGL（地面）の間みたいな五感を休める空気があった。

柿崎：その他に俺は、喫茶の雰囲気も好きだった。何か恋を語るって空間で。同じ建物なのに違った性格があって良かった。

宮田：外も含めて4つのシチュエーションが楽しめたな。ニュートラルコーナー、恋愛コーナー、餌を喰うところ、日だまりたたずみの場。
そう、今は日だまりがなくて残念だ。大浦の横のベンチは、のんびりしていた。ポカポカしてな。いろんな奴にも会えた。

宮田：旧校舎本館の取り壊しのとき学生だったおれたちは、何か残したいという思いで活動した。結果、先生・OBの協力で正木（正木記念館）の前に門が残った。今回もそんな気もあり旧守衛所の屋根の角の瓦とランプを鍛金の研究室入口の上に設けた。様々な思いの中でも、美術館設立は必要だと思っていたので、内心複雑だった。だから、学生のやっていた大浦の集会はいつもその中に入り学生の話は聞いていた。
話は昔に戻るが、丸まげを結ったおばちゃん。通称大浦小町。それから腰の曲がったみそ汁を出すおばちゃん、そう、味噌汁出すとき親指が汁ん中入っていて、あの味は何か良かったなぁ。あと、チケットを出すおばちゃん。この3人とも俺の健康状態を知ってんだ。「疲れてんじゃないの」とか、一声をかけてくれてた。田舎から出てきて一人暮らしだったんでうれしかったなぁ。芸大ならではの人と人とのいい触れ合いがあったんだよ。

聞手：鍛金の方々はよく揃って大浦にきてましたよね。

宮田：うん、アトリエの持つ緊張から、休息をとりにね。

柿崎：アトリエとは違う空気で、体をゆるめて、またがんばるって感じ。ほら、体力勝負でもあるし。本当にあの大浦はふっと、たたずんでいられた重要な空間だった。

宮田：新しい美術館の学生食堂は今までの大浦を踏まえた良いものになると信じているよ。

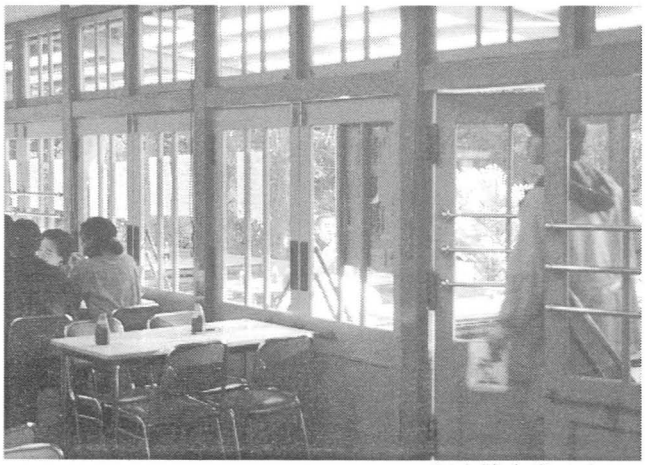
音楽学部　楽理科（平成３年入学）鬼久保　美帆さんから（寄稿）

ある冬の一日

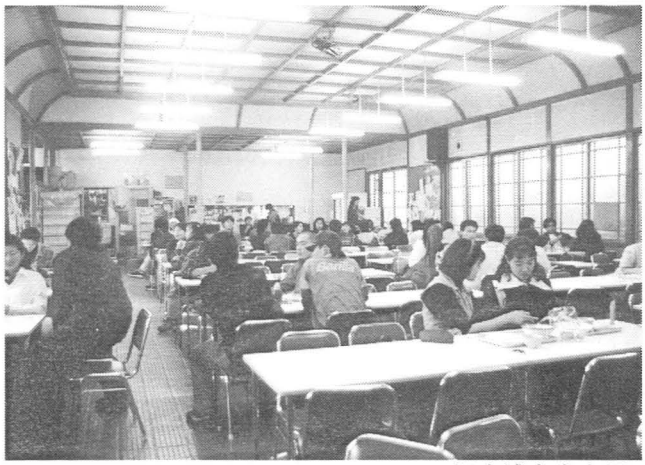
朝。千駄木方面から自転車通学の私は、言問通りの上り坂を一気に駆け上がり、息を弾ませながら、まずは右折し美校の門をくぐり、大浦食堂前に自転車を止める。今どき街では見かけない、平屋で木造のレトロなたたずまい。扉を押し開け、誰かいないかなあ、と食堂内を見回す。徹夜明けの朝食をとる建築科軍団や、一限目のソルフェージュを終えた音校の学生が集っている。軽く挨拶を交わしてから、授業へ出向く。

昼。お昼を食べに大浦へ行くと、入口側の壁には、長蛇の列ができている。その列を横切り、まずは席を確保しようとするが、すでに満席状態。唯一ストーブの周辺だけが空いているので、そこへ荷物を置く。広い室内を２つのストーブで暖めようとしているのだから、ストーブの周わりは異常に熱い。５分も座っていれば、のぼせ上がってしまう。そのうち他の席も空くだろうと思い、列の最後尾へ並ぶ。今日は何にしようかな。焼き魚にかぼちゃの煮物、ひじきにごはんと味噌汁。単品が安いからといって、次々に注文すると、キャッスルより高くつく。異常に暗算の早いおばあさんに支払いを済ませ、食券を持ってカウンターへ進む。ここでお迎え下さるのは、名物・大浦おやじ。自己紹介をした覚えはないのに、いつの間にやら人の名前や交友関係を把握されている。でも、仲良しになれば「さっき、なおみちゃんが探していたよ。図書館にいるって。」なんて伝言板にもなってくれる。

午後３時。図書館の資料をコピーしようと、生協へ向かう。試験シーズンだけあっ



旧大浦食堂の入口



旧大浦食堂内部

て、数人並んでいる。大学なのに生協にコピー機が一台しかないなんて間違っている！といつもと同じ感想を抱きながら、ここらで一息つこうと思い、お菓子と自販機のコーヒーを買い、大浦でくつろぐ。そこへ次から次へと集まる仲間たち。ほんの10分の休憩のつもりが、ずるずると居座るはめに。毎度ながら、自分の意志の弱さを思い知らされる。

夕方。軽くテニスをした後、大浦へ立ち寄る。この時間帯になると、バタ丼の香りが漂い始める。ついついにおいに誘われ、卵付きバタ丼梅干し１個を注文する。唐辛子をたっぷりかけ、ホクホク食べる。初めてバタ丼を食べた時、なんでそんなに人気があるのか分からなかったが、２、３度食べるうちに、癖になってしまった。寒い冬の日、テニスの後に食べるバタ丼のおいしさは格別だ。

まったりしていると、満杯になった灰皿の回収がくる。ああ、もうこんな時間になったのかと思うが、腰が上がらない。６時になっても、こちらがまだ帰る素振りを見せないと、あからさまに電気を消され始める。いよいよ帰らなければ、と思うが、これからの予定がたっていないので、また外のベンチで、だべりだす。今日はどこで飲もうか。

いつの間にか大浦は真っ暗になり、自販機の明かりだけが暗闇にボッと浮かび上がる。こうして大浦での長い一日に終わりを告げる。

現在、あの大浦食堂はもうない。しかし学生時代を思い出すと、いつもそこには大浦がある。

旧大浦食堂のカウンター

旧大浦食堂カウンター部分詳細

◆在校生の活動記録

○美術館計画見直し署名運動を通して（1996. 1）

芸術学２年　高木　愛子

「私たちはこのままの状態で建設される美術館に反対です。もっと時間をかけて吟味された美術館構想となることを希望します。よって現在の計画の見直しを求めます。」

東京芸術大学美術館（仮称）設置委員会へ提出した署名文には約１カ月で1000名を越す署名が集まった。古き良き大浦食堂への愛着、建築的価値など、署名して下さった方々の想いは主に大浦食堂の取り壊しに反対するものが多かったように思う。私としては大浦食堂への愛着や建築的価値というよりも、学生がそれぞれの棟から大浦食堂へ集まり、学部、学科からはなれ、落ち着いて交流できる場としての重要性に大浦食堂の価値を見いだしており、このまま美術館の構想が具体化されない状態でなおざりに取り壊されてしまって良いものだろうかと考えていた。しかし署名運動を行う際もっとも主張したかったことは、例えば芸術が生みだされる現場と美術館を統合して、どのようにして、実験的にわが国に前例の無い美術館にするのかなど、美術館構想の根本を明らかにすることであった。しかし実際のところ、単に大浦食堂の取り壊しに反対する運動と思われてしまった感があるのは、署名文があいまいであったことと私たちの活動が至らなかったためであり、残念である。

○WE ARE HERE　　大浦にて（1995.11. 2／12.12／1996. 1．9）

油科３年　三浦　理絵

木や動物と話ができる友達がいた。まるでおとぎ話のようだが、そんなことができたら、さぞかし楽しいだろうなァ。

自然破壊や核兵器、人種の壁、戦争、テロ、世界の抱えるたくさんの《考えたくない事実》酸欠で世界が死ぬのは時間の問題だろう。木―森はそれをどう思っているのだろうか。木とお話しができたら何か解決法がある？　だけど、木とお話なんて。現実離れ。でも人間同志ならそれができる。みんなそれぞれの立場、複雑な関係、めんどくさい問題、考えたくない未来、いろいろあるけど、それらがみんな溶けて―かたくるしくなくて―

「何か、イベントやろう。」

「イベント？　なんか違うなぁ。お祭り、祭りだよ！」

私と秋好さんが急にそんな話をしたのは、単にお祭り好きだったからだと思う。

ちょうどその頃、大浦食堂の取り壊しが学生に知らされました。誰かが反対の署名運動を始めたらしく、かなりの署名が集まっていました。私たちはピンときました。今、

学校全体が同じ話題を持てる、学生も先生も、事務の人達も。お祭りを開くチャンス到来です。早速、私達は“誰でも言いたい放題の集い—WE ARE HERE!"の企画を立てました。大浦食堂の前にマイクを一本置き、通りがかりの人に好き勝手なことを喋ってもらう、それだけの企画でした。別に、大浦以外の話題でその場が盛り上がっても構わないと思っていました。みんなが大浦食堂でごはんを食べながら友達とおしゃべりをするのと同じ、まったくのノン・ポリシーなのです。私たちがこの集いに何か意味を見いだしていたとすれば、WE ARE HERE—私達はここにいる—それだけでした。

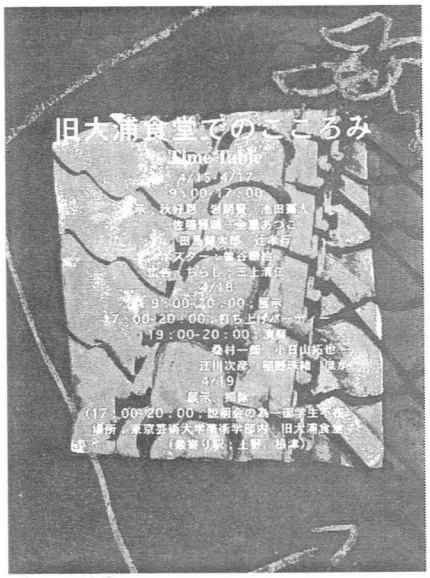
さて当日、やはり話題は大浦取り壊しと、美術館建設のことに集中しました。学生課の人に食ってかかる人、「僕無関心なんですけど」と言う人、自分の考える展示空間について熱っぽく語る先生。またやってほしいという声もあって、私達は第二回も企画しました。

それからは、話したこともない他科の先生や学生と話す機会も増え、なによりお祭り好きの仲間が増えました。だけどいいことばかりでもありません。私達は学校に反旗を掲げる学生運動のメンバーのように言われもしました。

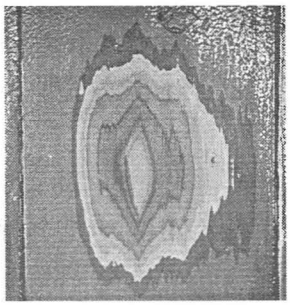
そしてもうひとつ、大きな溝を私達は見せつけられました。それは私達と学生の間の溝です。私達のなかで徐々に問題が浮き彫りになるのと反比例するように、学生のほとんどが無関心であるということに気づいていきました。そこで私は三回目のWE ARE HERE！を一人で開くことにしました。学校側の「大義名分」・私達の「反対運動」の両方の看板をはずし、“立場を越えた—私達の話—WE ARE HERE!"ができないか。最後のお願いのつもりでした。しかし当時、私の頭の中はパニックで、上手く言葉にならず、そのまま泣いてしまいました。そして大浦が消えると共に、尻切れトンボのようにこの計画も終わりました。世界には解決困難な問題がそれこそ命の数ほどあります。みんな仲良くするのは相当難しく、今日もいたるところでワイワイガヤガヤやっています。私達もまた“WE ARE HERE"は終わったけれど、学校の帰り道、あるいはお昼を食べながら、お酒を飲みながら、“私達の話”はつきることはありません。だから私にはこの文をどのように結んで良いのか解らないのです。ただ、一年たって、今また言えることは「これからももっと楽しいお祭りを開くつもりでいます。」

○個々の視点から　旧大浦食堂によるこころみ

1996年４月19日以降、東京芸術大学美術館（仮称）を建設するため学食「旧大浦食堂」は取り壊されることになった。1933年に生徒集会所として建てられて以来約60年、学生をはじめ、多くの人々の憩いの場として親しまれてきた。その旧大浦食堂の歴史的時間を含む「今」というものを、何か体験的な記憶にとどめておきたい、という願いのもと、自主企画によって展覧会を開いた。　（1996．４．15～４．19）



ポスター　　油科２年　曽谷朝絵



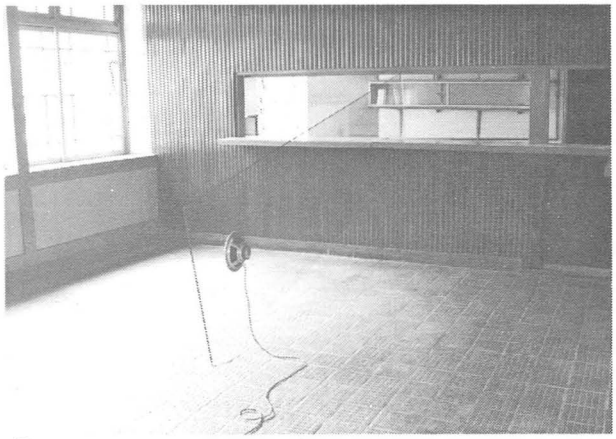
「層―塗装」重ねられた時に敬意を表して

油科３年　金重あつこ

「しいの実」

油科３年　三浦理絵

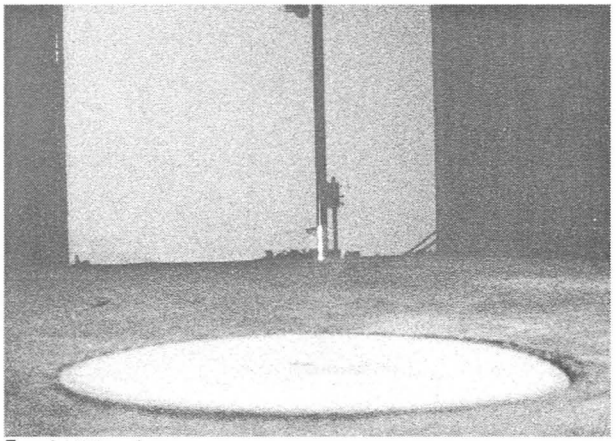
大浦の屋根に被いかぶさるように“しいの木”が生えていた。秋になると屋根の上に“しいの実”が沢山落ちます。



「mind communication」

油科３年　池田嘉人

私が制作、展示を行った部屋は、もともと喫茶室というコミュニケーションの場である。ここは、学生等客同士が交感する場であると同時に、調理場と部屋の間にはさんであるカウンターを通じて、店の者と客とが交感する場であるという二重の構造を持つ、インタラクティヴ・スペースである。そこに今仮設として建てられている“新しい大浦食堂”の音を流すことで過去・現在・未来という持続を実感しつつ、またガラスという物質を知覚することで、私と作品と観者とにおける新しいコミュニケーションの場がつくられればと、思っている。



「―無題―」

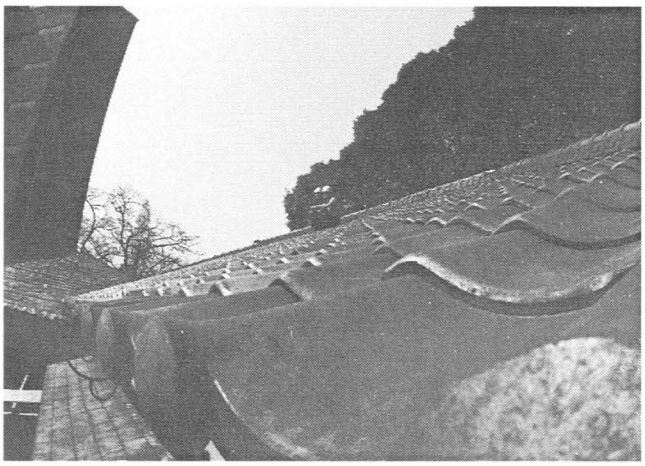
油科３年　佐藤雅晴

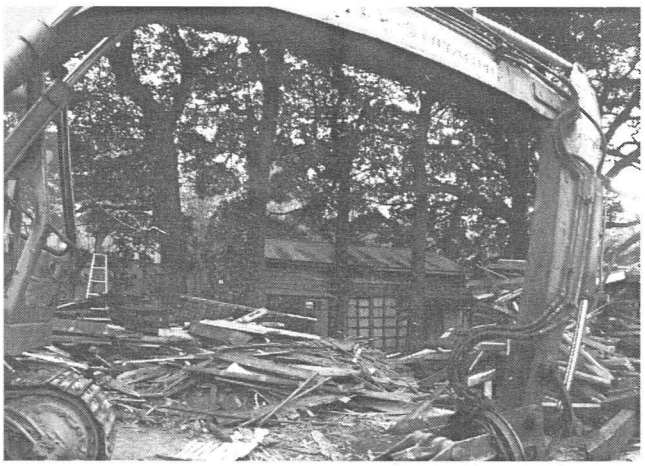
ガランとしたまるで食堂に生えたしっぽのような物置小屋
湿ったちょっとカビ臭いにおいの消滅する空間
１つの制度からもう１つの制度へと移り変わる瞬間に
この場と共有し合えた事に感謝している。

○大浦食堂を撮る

油科３年　秋好　恩

大浦食堂は、ただの食堂でした。それはいつの間にか私にとって、ただの食堂ではなくなっていました。
あんなにボロだ何だとけなし、なんら気にも止めず、ただ友達と会おうと覗き、休憩し、おしゃべりしながら飯を食う。それが、“大浦”でした。———そこに、急な「取り壊し決定の知らせ。「おいおい　どーいうこと？」
はじめは、大浦に対しての愛着からではなく、「学生の意見は聞かなくても解ってる」と言いたげな寝耳に水の決定に対しての憤りからでした。————以前から、せっかく音楽・美術を得意とする同年代の人間が集まる芸大という場所に、一緒に楽しんだり勉強ができるような、祭りなりイベントなりをやれたらなと友人と話していたから、唯一両学部の学生が集まる食堂がいきなり壊されることに対しては、なにか反発を覚えました。新しいコンクリートの美術館があのオンボロ、でもなぜかほっとする木造食堂にはたしてかなうのか？
そう思ってましたから“大浦の最後”には、様々な形で関ることになっていました。———まだ食堂として使われていたころはあまり危機感はありませんでした。全ての机、椅子が無くなって、全ての人が去った空っぽの大浦食堂に入った瞬間、これは何らかの形で残さなければ。という気にさせられたのです。とにかく写真は撮っておこう、と。
やはり壊されるかも知れないという予感と共にする“掃除”、磨いてみて知る事実、そして屋根裏で見た“力強い梁”。色々な過程の中ではじめて知る木造建築の本当の豊かさ、ボロじゃない、大浦はまだ生きている。
この世から消えてなくなるとき、大浦食堂は私たちに本当にたくさんのことを教えてくれました。私は今まで、ひとつのものを、しかも被写体としては興味を持ったことのない建築物を、こんなに愛着をもってたくさん撮ったのは　はじめてでした。撮ったのか、撮らされたのか。一体どちらなのでしょうか。





○ゲーテの三段階の認識と大浦掃除の体験のあとで（1996.4.1～4.9）

油科２年　田島健太郎

ゲーテによれば我々の対象に対する認識は三つのプロセスに分けられるという。第一段階として我々は五感を通して対象を認識する。色、形態、匂い、肌触り等々。第二段階はそれを通して我々は対象と自分との間における印象を認識する。それが自分にとって快いものか不快なものかどうなのかとか、それが好きだとか嫌いだとか、そしてさらにそれは自分にとってはたして有用で有益なものかどうなのか、無害なものかそれとも有害なものか、楽しませてくれるものなのか、何かを自分に与えてくれるのか等々の認識である。そして一般の通常的な意識はこの第二段階で対象を認識し、それがどうしてもそうなってしまうくらい自然に容易にそうなってしまうのだ。なぜならそのことが人生の運命までも左右しかねないのだから。しかし我々はそのことで対象に対する無数の誤謬にさらされており、それがしばしば人を恥じ入らせ人生を辛いものにさせているのだという。私もそう思う。

第三段階の認識に行く者がいる。その人は対象に対して好きとか嫌いだとか有用か有害かどうかという判断の仕方をあきらめ、静かな穏やかな目で対象そのものを観察するという神的な、平等な態度をとらなければならないと自覚するらしい。

大浦掃除の始まりの根本はこの第三段階に含まれる態度があったようなのだ。とはいっても当時大浦の掃除をしている先にも最中にもこのような認識は私には全くなされていなかった。掃除をしようと思った動機は次のようなものだ。「私個人は大浦に対する思い入れも愛着も人一倍あるわけではないし、大浦がなくなることに別に恨みがあるわけではない。」「ではなんでわざわざ自分から頭下げて掃除なんかするのだ、普通の意識からいったら理由が考えられない。」「それじゃあやっぱりやってみる価値があるな！」というような具合だった（笑）。実際掃除をしているといろんな人がやってきて、愛着や思い入れをどうこうと問いだたされて答えに窮したものだった。中にはそれはやってはいけないことだという人まで出てきたのだから（その人は汚れた大浦に愛着があったらしい。）困ってしまった。そのときは全くなんでこんな思い入れの少ない人間が掃除なんかするのだろうと自分でも苦笑いした。

しかし今思い起こして、やはりあの行為に私は重要性を感じたし、今はさらに感じている。結末は取り壊しになったのだからお前個人にとっては良い体験だったのかもしれないが大浦自体にとっては同じことではないかと問われるかもしれない。が、果たしてそうだろうか？そもそも美とは人間の意識から生まれてくるものなのか、それとも美とはもう存在していたものなのか？という問題を忘れてはいないだろうか。

自分にとって思い入れがあるとか好きだとかいう個人の意識から美が生まれてくる

としたらそれはいかにもおかしなことではないだろうか。また有用か有益かであるか否かで美を扱うのも滑稽なことだ。まさかミケランジェロの彫刻を好きか嫌いかで判断したり、または有益かどうかの多数の意識の合意のもとに取り壊すということなど考えられるだろうか？

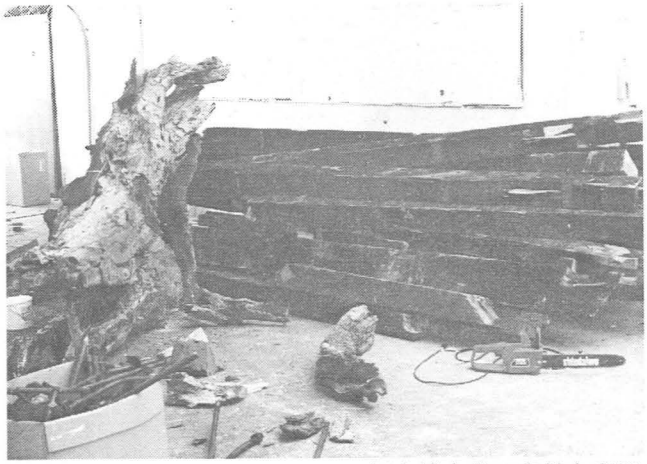
実際大浦食堂の建築的空間はそれを取り巻くものも含めてたいへん美しいものであったと感じたし、今もなおそう感じている。たぶんそれらがもつ人体に対する作用を私なりに触れながら感じたのだろう。だから今回建築学的な観点から究明されるこの企画に私も大いに興味をもっている。大浦の存在はまだあるかもしれないと思う。

○その他の学生の作品

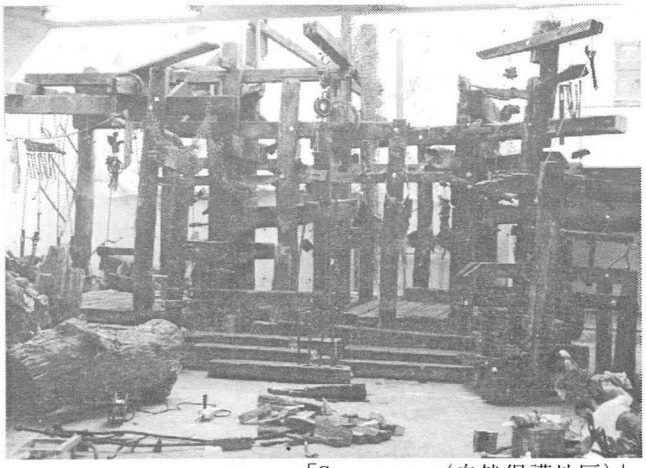
その他にも取り壊し決定にともない、学生の自主企画による、旧大浦食堂をテーマとしたさまざまな制作活動が行われた。
これらの活動は、営業期間中から始まり、最後は廃材に至るまで多くの作品として発表されてきた。

これらの作品はその一部である。

営業期間中における、学生作品の展示風景



旧大浦食堂の廃材を利用



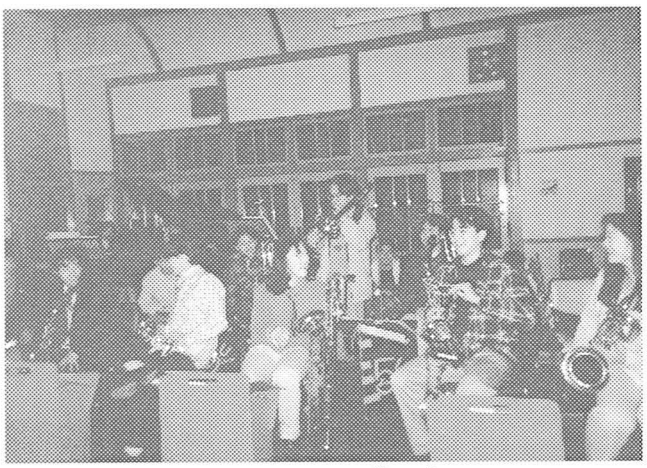
「Sanctuary（自然保護地区）」
油科修士１年　作田弘治

美術学部グランドにて展示

○大浦コンサート

建築科4年　金森　道

大浦食堂取り壊しに関するさまざまな意見が飛び交う中、私が企画したのは大浦コンサートであった。この古い木造の建物は五間×十間のオープンな矩形の平面を持っており、マスに区切られた木造の天井面との比例も気持ち良い空間を作り上げていたので、前からコンサートにいいと考えていたのだった。床は目の細かい、黒光りするタイル貼りになっていて、テーブルや椅子を取り去ると、緊張感あるステージ空間に生まれ変わる。外に通じる壁面のほとんどが観音開きの扉であり、楽器や道具の搬入搬出に有利だったばかりでなく、開け放つと柱列を介して屋外へつづく広がりを持つという、違う空間に変化する。伝統的な日本建築の持つ長所を、この建物も持っていることに感心した。そしてその長所が演目により使いわけられるよう心掛けた。コンサートは毎週末金曜の営業終了後18：00～20：00に行われた。中央棟のグランドピアノを搬入し、コンサート以外にも、自由に使われるようにした。これは意義深いことだと思う。というのは、わたしは自由発表の場としてのこの建物に期待していたからである。京都大学に行ったとき壊れかかっている講堂の前が、驚くべき演劇活動の城になっているのに感動した。古いものを足掛かりにして、人は時々思いもかけないような力を発揮する。芸大にもそのような場所が一つくらいあってもよかったのではないか。これは参加したひとに関係なく、私個人の気持ちである。



第二夜：MANTO VIVO

第一夜　1995.10.27
“エンターテイメント”
ロス･マエストリートス･デル･タンゴ
即興ジャズ
パテイオ・フラメンコ
サンバ・パーテイー

第二夜　1995.11.10
“器楽”
ピアノ独奏　・歌「椿姫」
パーカッション
MANTO VIVO　(ジャズ･サークル)

第三夜　1995.11.17
“邦楽”
箏曲　「石橋」
常磐津　「夕月船頭」
箏曲　「落葉の踊」
長唄　「元禄花見踊」
尺八　「陰陽句」
箏曲　「北国雪賦」

第四夜　1995.11.24
“声楽”
独唱　・　重唱
La Voce コンサート
メサイアより
「ハレルヤ・コーラス」

第五夜　1995.12.01
“映画”
「ぼくのおじさん」　フランス
“Mon oncle"
by/with Jacques Tati

食堂裏話

・芸大猫……学生から食べ物を得ようといつも食堂周辺にいた。海苔が好物らしかった。夜になると芸祭企画室に行き、ちゃんと布団で寝ていた。

・台風横丁…食堂周辺にはものすごい風が吹くらしい。作品が風で舞って何度もガラスが割れたりしたそうだ。厨房の網戸が破れていたのもそのため。絵画棟ができる前は建物の南面にもろに風を受けたらしい。春一番が吹くと彫刻棟の方から風がきた。あまりに強い風のため瓦がずれ、そこから雨漏りがおきて困ったそうだ（瓦は針金で止めていないのでずれやすかった)。以前学生がつくった作品が強風のため一夜にして潰れてしまったことから、けやきの木があったところを台風横丁と誰かが名づけた。

・欄間窓……引違い窓ではなくロープのついている窓は80年代につけかえられたもの。

・放送室……学内放送はここから発進していた。軒下のスピーカーはその名残。食堂内ではスピーカーを置いて音楽を流していたがうるさくて飯が食えないというので２～３回でやめた。その後、ここの扉は20数年間開かずの扉になった。

・焦げ跡……昭和37年のぼやの焦げ跡が、建物外部や天井裏にも一部残っていた。

・手すり……ドアの手すりは80年代に３カ所取り付けられた（以前は入口は３カ所)。理由は楽器などを持って肩や肘で押して食堂に入るとき、ドアの仕組みの関係上ガラスをよく割ってしまうからだそうだ。昔のガラスは薄くて割れやすいということもある。手すりはちょうど肘の位置に取り付けられていた。

・天井裏……天井裏へは換気口から蓋を開けて入れた（ちょうつがいがついている)。照明の配線工事などで天井裏へ入るため。

・メンズノンノ…93年５月号の学食選手権のコーナーに、大浦食堂が紹介される。雰囲気部門ではなんと１位に選ばれた。

・食堂蛇……食堂周辺にはヘビがいた。主人が朝来ると厨房で這っていたこともあるらしい。実測中に周辺の木になんと１メートル50センチもある抜け殻を発見。ヘビは縁起がいいといわれるが食堂の守り神としてここに住んでいたのだろうか。

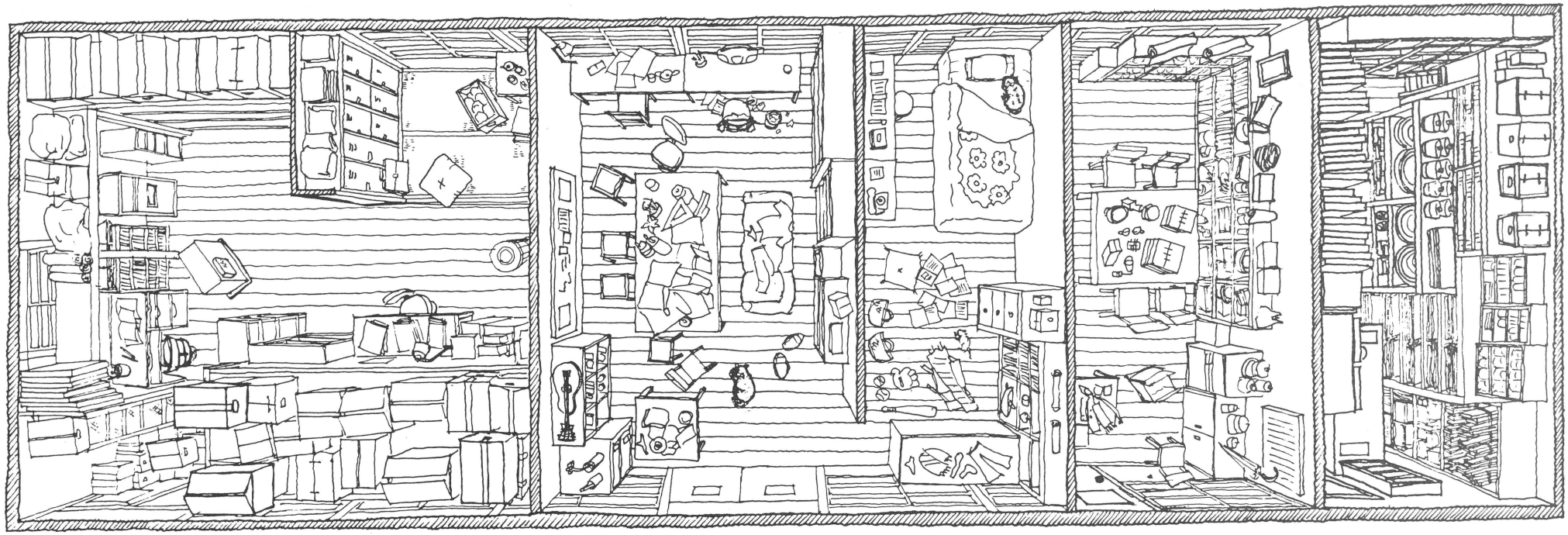
旧大浦食堂解体時に発見された２匹の蛇の話

解体中に２匹の青大将が発見された。１匹目は野地板と瓦の間から、２匹目は床下から出てきた。

１匹目は解体初日に発見された。体長約１メートル位、解体業者さんが地面に落としたのだが、しばらくして建物の中に入っていき、柱を伝ってまた小屋裏に入っていこうとした。しかし、内側からは小屋裏には入れず、あきらめてまた下に降りてきた。鴨居の上で、天井面から小屋裏へ入るための穴をしばらく探していたが、必死になって自分の家に帰ろうとする様子は、見る者の涙をそそった。そのあとその蛇は解体した材木の下に逃げ込んでしまった。

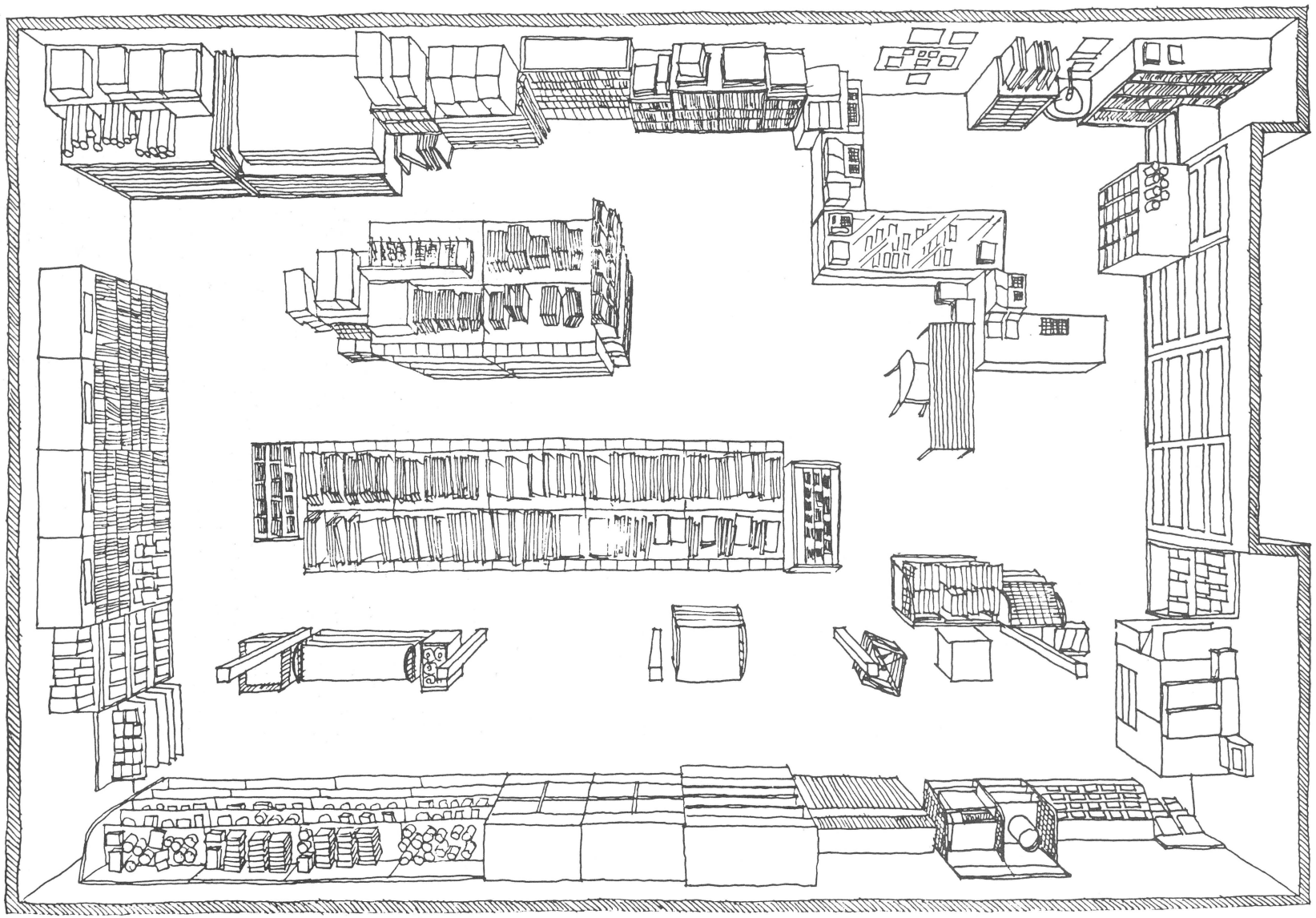
必死で自分の家に帰ろうとする蛇

旧大浦食堂の取り壊しと共に姿を消した企画室や生協などは、大学の福利厚生施設であり、学生生活の拠点として親しまれていた。ここに実測スタッフの熱意による調査記録資料を添付する。



生協事務所　芸祭企画室　四芸室（自治会室）　レモン画翠

旧美術学部食堂記録調査図面	
俯瞰図	
生協事務所、芸祭企画室、四芸室(自治会室)、レモン画翠	作図：吉田



生協

旧美術学部食堂記録調査図面

俯瞰図

生協	作図：吉田

◆編集後記

旧大浦食堂の実測記録をはじめてから、かれこれ１年以上が経ってしまいました。研究室の学生達も修了制作片手で製図と編集をしなければならず、建物がなくなってからも実測の図化をしていたものですから、大変な苦労をかけてしまいました。実測をしてみて、この建築を外観だけで判断していて誤解していたこともありました。食堂の建築も見かけからすると、老朽化が進み、屋外の支柱も腐っていて今にも壊れそうに見えていましたが、調査の結果、屋根小屋のトラスと壁との接合が非常に丈夫に出来ていることが分かりました。また、余談ではありますが、解体の際、職人さんから「頑丈でなかなか取り壊すのに骨が折れた」と言う話を伺うことができました。もう一つは、ペンキ塗りの格天井のことです。格天井をペンキ塗りにすることはとても信じられないことで、この１年間の疑問でした。今年の２月、中山正人さんのお話を聞いていた時、「天井はペンキなんか塗っていなかったよ」の一言でこの疑問は氷解しました。

新しい美術館の建設をめぐって学生の立て看板が立てられたことがありましたが、自前の美術館建設の悲願は10数年以前からあった訳で、教官側からは当然のことでしたが、それが大変に急なことでしたので、慌ただしいものでした。学生も何がなんだか良く分からないうえに、自分たちも知りたいとか、また、食堂がなくなるという目前の問題に振り回されたようで、今から考えてみると、学生達から反発がでたこともやむを得なかったのかもしれません。これに対し、大学主催の美術館建設に関する学生への説明会もたびたび開かれ、教官と学生の間でさまざまな考えを持つものどうしが接点を持ちえたことはとても良かったように思います。

この編集を通じて、この食堂が芸大の科を越えた多くの学生の交流の場であり、さまざまな想い出をつくり、教官，学生ともどもこの食堂に馴染み親しんで、取り壊しをいたみ、同じような気持ちを抱いていることが分かりました。新しい美術館の食堂も、このように多くの人達が馴染み親しみ交流できる場となるよう、また、この美術館による東京芸術大学の更なる発展を祈念したいと思います。

最後に、この編集にあたって取材や記録調査にご協力いただいた諸先生方，事務の方々，施設課の方々，卒業生の先輩諸氏，学生，食堂の皆さまにこのページをお借りしてお礼申し上げます。齊藤仁さんには、書物の引用を含め、多くのご指導を頂きました。あわせて感謝申し上げます。

平成９年７月

◆記録調査報告書作成スタッフ

○前野まさる（東京芸術大学建築科教授）

○市毛秀人、兼弘彰、加藤雅大、北川卓、佐久間慎一郎、徐旻、早川江里、
吉田直子、鉄矢悦朗、アンナ・プユエロ・アバド

（前野研究室・斎藤研究室大学院生及び研究生）

実測調査　1995年12月中旬

編集作業　1997年７月

旧美術学部食堂
記録調査報告書
（東京美術学校生徒集会所・旧大浦食堂）

平成９年９月１日

編　集：東京芸術大学　建築科　前野研究室
発　行：東京芸術大学　美術学部
印　刷：よしみ工産株式会社